

黒谷川郡頭遺跡Ⅴ

昭和63年度発掘調査概要

1990

徳島県教育委員会



調査区全景(西より)

卷頭図版 2



住居跡 S B 501 検出状況

卷頭図版 3



溝 S D 501土器列 検出状況

序

黒谷川郡頭遺跡は、弥生時代終わりから古墳時代始めにかけての集落遺跡で、昭和59年度より5次にわたって調査が行われてきました。これまでの調査で全国でも数少ない朱の精製集落であることが判明し、また数多く出土する土器は、当時の徳島の地域性を明瞭に示すものとして、県内外から注目されています。

本遺跡は、調査対象地が河川敷内にあたるため常時冠水に悩まされましたが、今回の調査においても土器列を伴った溝をはじめとする良好な遺構に恵まれました。これらは、徳島県における弥生時代終末期の研究上貴重な資料となったものと考えております。

本書の刊行にあたりましては、調査・整理の期間に御指導・御協力をいただきました関係各位に厚くお礼を申し上げますとともに、今後もより一層のご支援を賜りますようお願い申し上げます。

平成2年3月

徳島県教育委員会

教育長 小原和夫

例 言

- 1 本書は黒谷川中小河川改修事業に伴う発掘調査概要報告書である。
- 2 発掘調査は徳島県土木部河川課の依頼を受けて徳島県教育委員会文化課が実施した。
- 3 調査は昭和63年6月1日から平成元年1月31日まで実施した。
- 4 収録した資料のうち遺構は全員が分担実測し、遺構の製図、遺物の実測は大西、片山、山本、林が、写真撮影は大西が行なった。
- 5 本書で用いた絶対高は海拔を示す。方位はすべて磁石である。
- 6 土色の判定に際しては、小山正忠、竹原秀雄編『新版標準土色帳』1967によった。
- 7 fig. 2の地形図は建設省国土地理院発行の2万5千分の1地形図「大寺」を転載したものである。
- 8 今回の調査において下記の方々より御教示を受けた。
浦上雅史、大野左千夫、岡内三眞、寒川旭、下条信行、土井孝之、藤好史郎、前田敬彦、松下勝、森岡秀人、山本三郎
- 9 調査は以下の組織で行なった。

調査主体	徳島県教育委員会文化課	
課長	三舟侑司	
課長補佐	岡野嘉夫(当時)	
庶務係長	天野尊温	
事務主任	大八木芳子	
文化財保護班長	河野良昭(当時)	
調査担当	事務主任	菅原康夫(当時) 昭和63年6月～7月
	主事	大西浩正 昭和63年7月～平成元年1月
文化財調査員	早淵隆人(当時)、扶川道代(当時)、白木宏治(当時)、片山敦子	
- 10 報告書作成業務においては、福家清司(文化課社会教育主事)、竹岡正雄(文化課主事)の助力を得た。発掘調査では大村祥之、明石辰也、谷本貴美、張壽(作業員)に、報告書作成作業では山本愛子(文化財調査員)林郁恵(作業員)に実測作業等の協力を得た。
- 11 本書は大西が編集・執筆したが、遺物観察表は、片山、山本の協力を得た。

本文目次

I. 調査の経過	1
II. 基本層序	5
III. 遺構と遺物	7
§ 1 第1遺構面の遺構と遺物	8
竪穴住居跡S B501	8
土坑S K501	14
土坑S K502	15
溝S D501	16
溝S D502	43
溝S D503	45
建物跡S A501	45
第1包含層出土土器	47
§ 2 第2遺構面の遺構と遺物	49
土坑S K511	49
土坑S K512	50
土坑S K513	51
土坑S K514	51
土坑S K515	52
第2遺物包含層出土石製品	54
IV. まとめ	56

挿 図 目 次

fig. 1	調査区位置図	1
fig. 2	黒谷川郡頭遺跡周辺の遺跡	2
fig. 3	調査風景	4
fig. 4	調査風景	4
fig. 5	第IV次、V次調査遺構配置図	6
fig. 6	基本土層図	7
fig. 7	第V次調査区遺構配置図	9, 10
fig. 8	住居跡S B501 実測図	11
fig. 9	住居跡S B501 ビット1内遺物出土状況	12
fig. 10	住居跡S B501 出土土器実測図	13
fig. 11	住居跡S B501 出土石臼実測図	14
fig. 12	土坑S K501 実測図	15
fig. 13	土坑S K502 実測図	16
fig. 14	土坑S K502 出土土器実測図	17
fig. 15	土坑S K502 出土土器実測図	18
fig. 16	溝S D501 遺物出土位置図	20
fig. 17	溝S D501 遺物出土位置図	21
fig. 18	溝S D501 遺物出土位置図	22
fig. 19	溝S D501 遺物出土位置図	23
fig. 20	溝S D501 遺物出土位置図	24
fig. 21	溝S D501 遺物出土位置図	25
fig. 22	溝S D501 Fブロック実測図	26
fig. 23	溝S D501 出土土器実測図	27
fig. 24	溝S D501 出土土器実測図	28
fig. 25	溝S D501 出土土器実測図	29
fig. 26	溝S D501 出土土器実測図	30
fig. 27	溝S D501 出土土器実測図	32
fig. 28	溝S D501 出土土器実測図	33

fig. 29	溝 S D501 出土土器実測図	34
fig. 30	溝 S D501 出土土器実測図	36
fig. 31	溝 S D501 出土土器実測図	38
fig. 32	溝 S D501 出土土器実測図	39
fig. 33	溝 S D501 出土土製品・石製品実測図	40
fig. 34	溝 S D501 上層出土土器実測図	41
fig. 35	溝 S D502 実測図	42
fig. 36	溝 S D502 実測図	43
fig. 37	溝 S D503 実測図	44
fig. 38	溝 S D503 出土土器実測図	45
fig. 39	建物跡 S A501 実測図	46
fig. 40	第 1 遺物包含層出土土器	47
fig. 41	第 1 遺物包含層出土土器実測図	48
fig. 42	土坑 S K511 実測図	50
fig. 43	土坑 S K512 実測図	51
fig. 44	土坑 S K513 実測図	51
fig. 45	土坑 S K514 実測図	52
fig. 46	土坑 S K515 実測図	52
fig. 47	第 2 遺構面各遺構出土土器実測図	53
fig. 48	第 2 遺物包含層出土土器	55

表 目 次

tab. 1	黒谷川郡頭遺跡住居跡一覽表	58
tab. 2	出土土器観察表	69
tab. 3	出土土器計測表	92

図 版 目 次

- P L. 1 第Ⅳ・Ⅴ次調査区航空写真（モザイク）
- P L. 2 第Ⅴ次調査区航空写真
- P L. 3 住居跡S B501全景（上：東より 下：南より）
- P L. 4 住居跡S B501柱穴内遺物出土状況（上）中央柱穴検出状況（下）
- P L. 5 住居跡S B501炉（上）周壁（下）検出状況
- P L. 6 土坑S K501全景（西より）
- P L. 7 土坑S K502検出状況
- P L. 8 土坑S K502全景
- P L. 9 溝S D501、S D502全景（上：北西より 下：南より）
- P L. 10 溝S D501遺物出土状況（1）
- P L. 11 溝S D501遺物出土状況（2）
- P L. 12 溝S D501遺物出土状況（3）
- P L. 13 溝S D501遺物出土状況（4）
- P L. 14 溝S D501遺物出土状況（5）
- P L. 15 溝S D501遺物出土状況（6）
- P L. 16 溝S D503全景（南より）
- P L. 17 建物跡S A501全景（上：東より 下：南より）
- P L. 18 土坑S K511全景
- P L. 19 土坑S K512全景
- P L. 20 土坑S K513全景（上）遺物出土状況（下）
- P L. 21 土坑S K514全景
- P L. 22 第2遺構面土坑群検出状況（上）土坑S K515（焼土坑）検出状況（下）
- P L. 23 土坑S K516全景
- P L. 24 住居跡S B501、S D501出土土器
- P L. 25 土坑S K502出土土器
- P L. 26 溝S D501出土土器（1）
- P L. 27 溝S D501出土土器（2）
- P L. 28 溝S D501出土土器（3）
- P L. 29 溝S D501出土土器（4）

- P L. 30 溝S D501出土土器 (5)
- P L. 31 溝S D501出土土器 (6)
- P L. 32 住居跡S B501出土石臼(上) 溝S D501出土紡錘車(中) 石磨丁(下)
- P L. 33 溝S D501出土砥石、第1包含層出土石鏃
- P L. 34 溝S D501上層、第1包含層出土土器
- P L. 35 第2遺構面各土坑出土土器
- P L. 36 第1、第2包含層出土石器

I. 調査の経過

昭和59年度に開始した黒谷川郡頭遺跡の発掘調査は、今回が第V次調査となった。このうち第I～Ⅲ次調査は、舟橋下流部分にあたる河川工事用杭No.4～5にかけてで実施し、弥生時代後期後半から古墳時代初頭にかけての集落中央部分を確認することができた。第IV次調査以降は、暫定掘削が終了しているもの遺物包含層以下が良好に遺存している工事用杭No.2+50から下流部分について順次調査を進めてきている。今回の調査区は、第IV次調査区の東に接した場所にあたり調査面積は約1100㎡である。

第IV次調査では、住居跡、建物跡が各1棟ずつ検出されたが、弥生時代後期後半の単一時期の遺構に限られることもあり、これまでの調査に比べて遺構密度が希薄であった。このことから第IV次調査区は、集落域外縁部であると判断した。また調査区中央部を南北方向に横断して検出された大溝（SD401）が集落域を区画する意味をもつものと考えられ、今回の調査に居住空間の実態解明の課題を持ち越していた。

今回の調査で検出された主な遺構は、二重の環状溝（溝SD501、502）、堅穴住居跡I

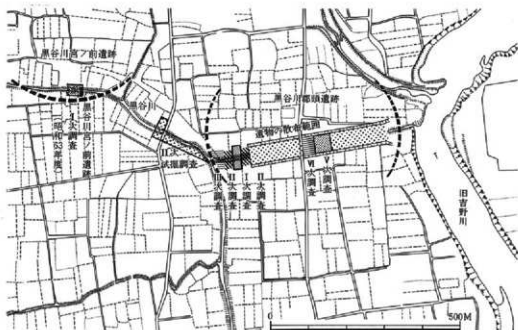


fig. 1 調査区位置図



fig. 2 黒谷川郡頭遺跡周辺の遺跡

棟（S B501）、掘立柱建物跡1棟（S A501）、土坑2基（S K501、502）である。二重の環溝は、調査区南西部を弧状を描いて検出された。このことを考えると、第IV次調査区は居住空間を区画する環溝の外側である可能性が強まった。しかし、今回の調査区は環溝内側といってもなお遺構密度が低く、集落の中心部は調査区の北東側に向かって拡がるものと思われる。

第V次調査は昭和63年6月1日に開始し、平成元年1月31日に終了した。この間に調査担当者の交替、黒谷川宮ノ前遺跡の緊急発掘、夏期の水位の上昇による調査区の冠水など幾つかの要因が重なり、調査に予想以上の時間を要した。また、本遺跡で初めて弥生時代の前期の遺構が確認され、また包含層資料に縄文時代晩期の土器片も何点か認められることから、当該地周辺に弥生時代前期以前にまで遡り得る集落存在も考えられるようになった。

なお遺跡番号は、第III次調査から採用している調査年次ごとの記載を踏襲し、500番代で示した。なお土坑（S K）については、2枚の遺跡面から遺構が混乱しないように、弥生時代後期後半の遺構は501、502で、弥生時代中期以前の遺構は510番代示した。

以下調査の経過について触れる。

調査日誌抄

1988. 6. 2 降雨のなか資材搬入。調査を開始する。
6. 3 前日來の大雨のため、川の水位が急激に上昇し、ベルコン等の資材が冠水する。
6. 7 調査区設定、表土除去開始。
6. 28 第1遺物包含層までの堆積土除去完了。包含層掘り下げ開始。
7. 5 溝S D501を土器列を伴った状態で確認。
7. 7 菅原が四国縦貫道担当に移動、かわって大西が調査を引き継ぐ。調査状況等の引継ぎを行なう。
7. 11 河川工事用杭の確認作業により、杭の誤差を修正。
7. 19 天候不順のため調査区内への水の侵入が著しく、一週間連続で排水作業を続ける。
7. 27 増水期の遺構検出が不可能なため、溝S D501など一部検出を開始していた遺構を埋め戻し、河川の水位の低下を待つことにする。

8.12 包含層除去に努める。盆休みに備え安全対策。

8.31 包含層除去完了。8月は24日の出勤日中11日が雨。調査が著しく停滞する。

9.3 第1遺構面精査。溝S D501、502を確認。全景写真を撮影。黒谷川宮ノ前遺跡の調査に入るため全面にシートをかけ、調査を一時中断する。



fig. 3 調査風景

9.19 黒谷川宮ノ前遺跡の調査が一部完了したため、調査を再開する。遺構面精査。

9.28 調査区全域で遺構確認がほぼ完了する。

10.4 黒谷川宮ノ前遺跡の調査再開のため、再度調査を中断する。

10.31 調査再開。溝S D501、502検出開始。

11.4 溝S D501全域よりおびただしい数の完形土器が現位置を保って出土。一方溝S D502からは土器片が稀にしか含まない対症的な様相を示す。

11.8 溝の検出を進める一方で、土器列の実測開始。

11.9 溝S D501 - 土器列検出完了。完形土器が50個体余りを数える。

11.15 溝S D501、502、503遺物出土状況写真を撮影。土坑S K501平面図作成。

11.17 溝S D501土器取り上げ開始。並行して見通し断面図作成。土坑S K502平面プラン確認、掘り下げ。

11.18 土坑SK502内に多量の土器が確認される。土器出土状況を急ぎ実測する。

11.19 午後より黒谷川宮ノ前遺跡の現地説明会を開催。見学者80名余り。

2.3 住居跡SB501掘り下げ開始。ピット検出に努める。



fig. 4 調査風景

- 12. 7 住居跡 S B 501 床面をほぼ検出するが、一部判然としない部分があり、建て替えの可能性をふまえて検討する。
- 12. 13 住居跡 S B 501 周溝確認、一部に重なりがあるため、短期間で建て替えがあったものと判断する。航空写真に備えて河川敷内にヘリポートを設置。調査区全域を清掃。
- 12. 14 好天に恵まれ航空写真を撮影無事終了する。
- 12. 16 現地説明会控え、12月には異例の大雪。調査区の損傷を防ぐために雪溶け前に除雪作業を行なう。
- 12. 17 午後現地説明会開催。見学者70名。
- 12. 20 S B 501、S D 501、S K 502をそれぞれ調査区が許す範囲で拡張する。第2遺物包含層掘り下げ開始。
- 12. 27 現場周辺大掃除。年末年始の休暇に入る。
- 1989. 1. 5 現場再開。S B 501、S D 501拡張部分掘り下げ。
- 1. 13 住居跡 S B 501、溝 S D 501完掘状況写真撮影。
- 1. 24 住居跡 S B 501断ち割り。調査区中央部にだめ押しトレンチ設定。
- 1. 25 第2遺構面 S K 513、514完掘。だめ押しトレンチ土層図完了し、第V次調査を終了する。

II. 基本層序

調査区は、現在黒谷川の河川敷内の中州部分にあり、近年行われていた河川改修に伴う暫定掘削によって、現地表面から2.5m下まで、すでに掘削されていた。今回調査により確認できた基本的な堆積状況は、1 オリーブ褐色粘質土層、2 黄褐色粘質土層、3 黒褐色粘質土層、4 黒褐色粘質土層、5 灰オリーブ色粘質土層、6 灰オリーブ色粘質土層、7 灰オリーブ色砂質粘質土層である (fig. 3)。

1、2は、無遺物であるが、第I次調査の16、17層との対応が考えられ、奈良から平安時代の堆積層と推定される。3は黒谷川郡頭遺跡で共通してみられる弥生時代後期後半から庄内式併行期の遺物を多量に含む包含層である。4は、弥生時代後期後半の遺構面に部分的にみられる落ち込みの埋土で、弥生時代前期新段階を中心とした時期の遺物が、散発的に混じり込む。5は、本遺跡で今回初めて確認された弥生時代前期の土器を含む包含

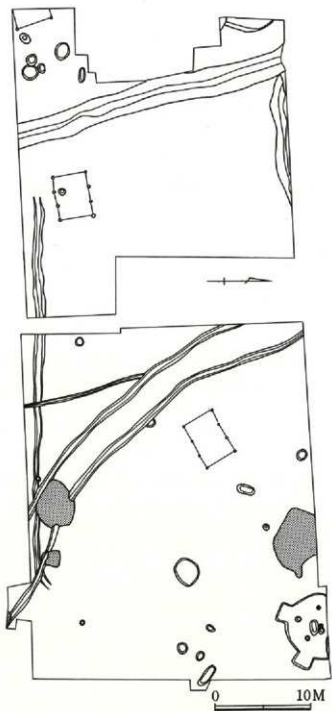


fig. 5 第IV次、V次調査遺構配置図

層である。弥生時代後期後半の遺構面は、基本的に4ないし5層の上面でとらえられ、標高1.1m前後である。6層上面は弥生時代前期新段階から中期初頭にかけての遺構面である。これ以下は、グライ化が進み、徐々に砂質が強くなる。したがって今回の最終遺構確認は、6層上面までとした。しかし、砂層の直上にあたる7層まで土器の細片は出土しており、調査区近辺に弥生時代前期以前の集落が存在したことも想定する必要があると考えられる。

また、黒谷川郡頭遺跡では、従来より砂の筋状の吹き出しを確認していたが、今回も認められたことから検討を加えたところ、大地震による液状化現象で生じた噴砂であることが判明した。調査区を南東から北西方向にのびるもっとも大きな砂の吹き出しは、2層下面でほぼ止まっていることから、漠然とながら時期的に奈良・平安時代より古いだろうとの判断がつく。

噴砂を引き起こす規模の地震は、徳島県ではおおむね100年前後の周期で発生する南海地震の可能性が高い。今回確認された噴砂は、和歌山県川辺遺跡で確認された白鳳の南海地震（684年）の噴砂と類似しているとの指摘がある。しかしながら、発生時期の上限は、弥生時代終末期まで遡れるため、現在のところ特定するに至っておらず、今後各層の正確な時期判断ができた時点で、再度検討したい。

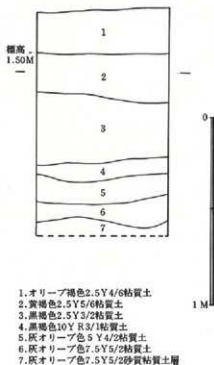


fig. 6 基本土層図

Ⅲ. 遺構と遺物

今回の調査では、弥生時代後期後半から末の遺構面（第1遺構面）と弥生時代前期新段階から中期初頭にかけての遺構面（第2遺構面）の2時期の遺構面が検出された。以後、遺構面ごとに遺構と遺物について説明する。

§1 第1遺構面の遺構と遺物

検出された遺構は、環溝状の溝2、竪穴住居跡1、掘立柱建物跡1、土坑墓2、その他溝、土坑、ピットなどである。(fig. 7)

竪穴住居跡S B 501 (fig. 8)

調査区の北東端で検出された方形の張り出し部分をもつ円形住居跡である。住居跡の北半分が、現流路に削りとられていたため検出不能であった。復元径約6.8mの円形プランをもつと考えられ、現存する壁高は、30cm前後である。2箇所で見られる張り出し部は、いずれも2.0m×1.0m前後の長方形を呈す。

住居跡の埋積土は、1、黒褐色砂質粘質土 2、にぶい黄色粘質土 3、灰オリーブ色粘質土 4、褐灰色粘質土 5、褐色粘質土 6、黒色粘質土（炭化物多量に含む） 7、灰オリーブ色粘性砂質土 8、黄灰色粘質土 9、黄灰色粘質土 10、灰色砂質土 11、粘性砂質土となり、このうち、6は炉の埋積土である。壁際には、幅10cm、深さ8cmの周溝が、張り出し部分も含めて巡っている。この周溝は、西側で一部二重に掘られ、乱れた部分があることから、建物の増築・建替えの痕跡と理解できる。壁際には、約40cm幅で深さ5cm前後の段を作られている。ここからは、甕・鉢が掘え置かれた状態で出土した。この段状の落ち込みは、東側張り出し部前面では意図的に途切れるが、南側張り出し部全面では、一度作ったのち埋められた可能性が強い。したがって、当初東側張り出しをもった住居跡を建て、増築の際、南側張り出し部を設けて前面にあたる部分を埋めたと解釈したい。

床面中央部よりやや南に偏ったところで、炭化物が多量につまった落ち込みが検出された。長軸1.5m、短軸90cmの楕円長方形の平面プランを呈し、深さは7cm前後と浅い。落ち込みの底でも焼土はみられず、長時間火を受けていたと考えにくい。一応炉としておくが、今後検討の必要がある。

主柱穴は、中央柱穴(P3, P6)を含めて6本構造になると予想されるが、確認されたのは、4箇所6本である。P2・P5、P3・P6は、増築時後者から前者に柱を立て直したと考えられる。一方P2、P4では柱位置の移動が認められない。柱穴の深度は、P1、P2、P3が40cm前後、P4、P5、P6は20cm前後である。各柱心間の距離は、P1-P2 2.3m、P1-P4 2.5mを測る。P1内より広口長頸壺が口頸部を欠損し

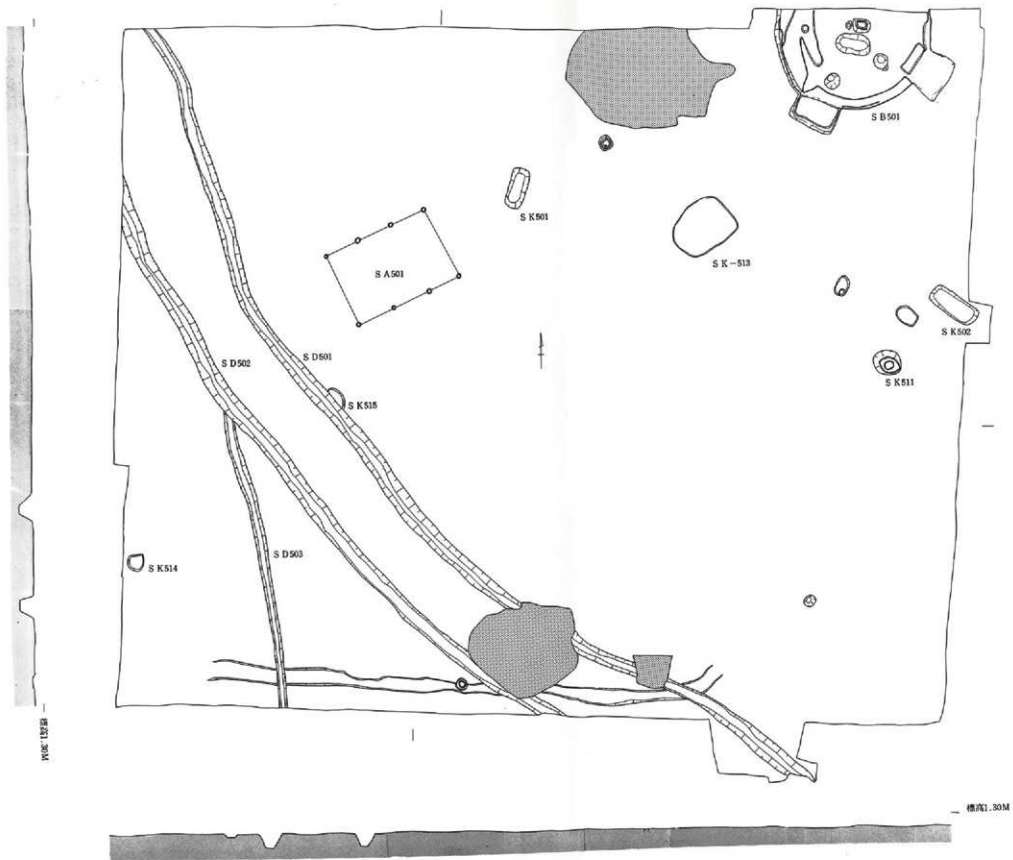


fig. 7 第V次調査区遺構配置図

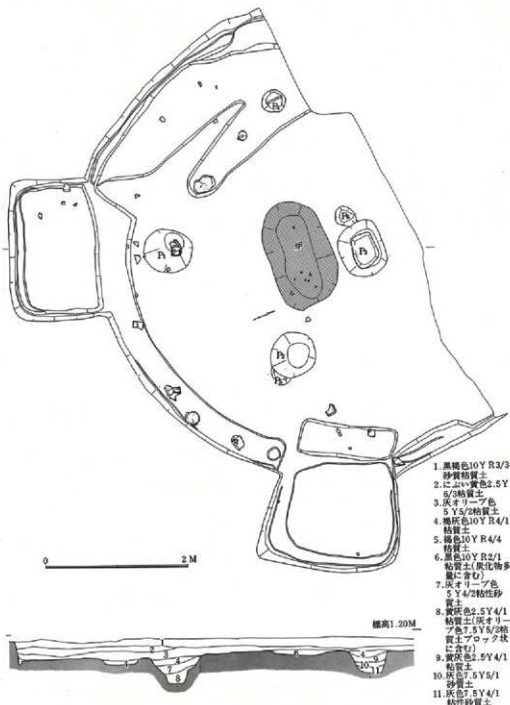


fig. 8 住居跡SB501 実測図

た状態で出土した (fig. 9)。第Ⅲ次調査住居跡 (S B 304) では、中央柱穴で鉢形土器を埋置されていたため、住居に係わる地鎮の機能を考えた。今回の場合も、住居建て上げ時の地鎮のため埋められたと可能性が高い。

2箇所の張り出し部は、東側のものが先に設けられ、南側のものが増築されたようだが、双方の埋積土には差がなく、埋没の同時性を示す。したがって、南側の張り出し部が増築されたのちも東側の張り出し部が使用され続けたと判断できる。

張り出し部をもつ円形住居跡は、本遺跡で4棟 (S B 102, 106, 103, 108) 確認されている。この平面プランは、黒谷川Ⅰ式 (新相) 併行期に盛行し、黒谷川Ⅱ式 (古相) まで残ると考えられる。この構造は、居住用の建物としてより、工房としての機能に由来するものと理解したい。

本住居跡からも、朱の精製用具である石臼、原料である辰砂の細片が出土している。従来住居跡 S B 304が、朱の精製を示す最も早い時期の遺構と考えてきたが、この住居跡はそれより若干先行し (黒谷川Ⅰ式 (新相))、朱の精製の開始が弥生時代後期後半に遡ることが明白となった。



1. 褐灰色10Y R 4/1粘質土
2. 灰オリーブ色5 Y 4/2粘性砂質土
3. 黄灰色2.5 Y 4/1粘質土 (灰オリーブ色7.5 Y 5/2粘質土をブロック状に含む)

fig. 9 住居跡S B 501
P 1内遺物出土状況

住居跡S B 501 出土土器 (fig. 10)

住居跡S B 501では、周壁に沿った床面から(1)～(4)の土器が出土している。広口長頸壺体部(6)はP 1内より出土し、地鎮行為にともなって埋めこまれたものである。甕形土器(1)は大きく「く」の字状に外反する口縁部と倒卵形の体部をもち、体部中位やや上方に最大径をもつ。体部外面は、ほぼ水平方向のタタキののち下半部にヘラミガキを施す。内面は肩部にユビオサエ、以下ヘラケズリである。胎土は結晶片岩粒を含む吉野川南岸のものであるが、技法的にみると、外面下半に3mm幅の細かいヘラケズリを施す点に鬚紋系甕形土器と共通性がみられる。(2)は甕形土器底部である。外面タタキのち細かなタテハケ、内面は粗いヘラケズリで調整する。

鉢形土器(3)は、体部が半球形を示し、口縁部が屈曲して外反する。全体に厚ぼったく、内外面とも原体幅の広いヘラケズリである。胎土は砂粒を多く含み、結晶片岩粒は含

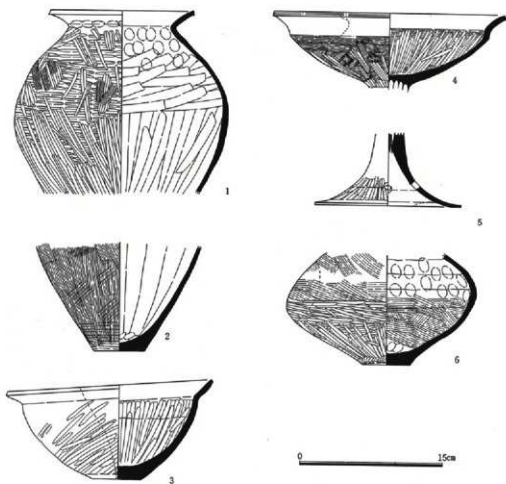


fig.10 住居跡SB501 出土土器実測図

まない。高杯受部（4）は、口縁部が屈曲して外反するタイプのものである。体部外面を細かなハケ、ないしは部分的にヘラミガキで調整し、内面はヨコハケ+入念なヘラミガキを施す。脚部とは接合法で接合される。この土器も（3）と同様の胎土である。この胎土は、概要報告書Ⅲ・Ⅳで指摘した淡路系の土器のうち南淡町阿知正福寺遺跡などでみられるものに類似する。

高杯脚部（5）は、外面にヘラミガキが看取できるが、表面剝離が著しい。広口壺形土器（6）は、算盤玉形の体部が復元されたが、長頸壺ないしは細頸壺の形態をとるものと考えられる。外面は体部上半ナメハケ、下半は入念なヘラミガキがなされる。内面は上

半にはユビオサエを顕著に残し、下半はハケで調整する。

遺物の点数も多くなく、時期決定をするにはやや危険性があるが、黒谷川I式でも新しい様相を示すものと考えておく。円形の平面プランをとる住居跡では、S B 106、108とはほぼ同時期のもので、S B 102、106やS B 304より若干先行すると考えたい。これまで遺物が少なかった黒谷川I式（新相）の年代を示す遺物である。

住居跡S B 501 出
土石臼 (fig. 11)

住居跡床面と南側張り出し部の覆土からそれぞれ出土したもので、接合関係をもつ。砂岩製でA、B面とも擦痕をとどめる。A面では、中央部の窪みに同一方向の強い擦痕が認められ、一部には敲打痕も看取できる。B面も同様に中央部に擦痕が、縁辺部に敲打痕を残している。現存する長辺25.6cm、短辺14.0cm、最大厚6.7cmである。

土坑SK501 (fig. 12)

調査区中央部やや北よりに位置し、長軸を南北方向に向け

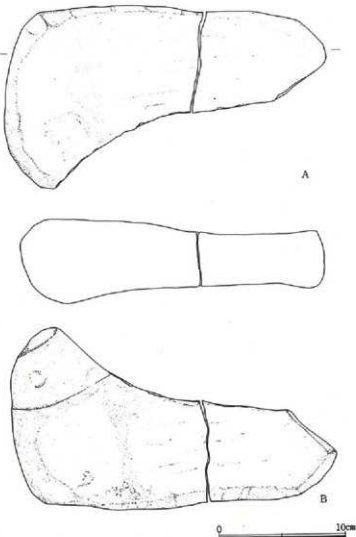


fig. 11 住居跡SB501 出土石臼実測図

る楕円長方形の平面プランもつ土坑である。長軸1.7m、短軸70cmを測る。断面は深さ約50cmであり、逆台形状となる。埋積土は3層に分離され、1. 暗褐色砂質粘質土 2. 暗褐色粘質土 3. 灰オリーブ粘質土である。遺物は各層から出土しているが、ほとんどが細片であり、図化し得なかった。土坑墓の可能性も考えられるが、決め手を欠く。黒谷川I式併行期のものである。

土坑SK502 (fig. 13)

調査区東端に位置し、長軸をN45Wに向ける楕円長方形の土坑である。長軸2.2m、短軸95cm、深さ28cmである。断面は梯子形を示す。埋積層は2層に分離され、1. 黒褐色粘質土 2. 黒褐色粘質土(炭化物含む)である。

2層の上面に完形の広口壺・甕・鉢・高杯が破砕された状態で多数出土しており、土坑墓に供献した土器と把握できる。第II次調査土坑SK129と類似した幼児対象の土坑墓と考えられる。

他の遺構と同様に黒谷川I式の範囲でとらえられる。

土坑SK502 出土の土器 (fig. 14, 13)

広口長頸壺形土器(1~3)は、口縁端部を上方にわずかに拡張して、端面上に擬凹線を施すもの(1)、口縁端部に強いヨコナデを加えて、はねあげ口縁気味に調整するもの(2)、丸くおさめるもの(3)など口縁端部の形態にバリエーションがみられる。

(1)は口縁端部をわずかに上方に拡張する。頸部はほとんど直立しており、口縁部は大きく外湾して開く。外面は口縁部タテヘラミガキ、頸部タテハケ+一部タテヘラミガキである。内面は口縁部ヨコナデ、頸部ヨコヘラミガキ、頸部つけ根部ユビオサエで調整する。(2)は、直立する頸部から口縁部が緩やかに外湾して立ち上がる。外面は口頸部ともタテハケを施し、頸部に一部タテヘラケズリを加える。内面は口縁部ヨコハケ+タテヘラミガキ、頸部は原体幅の広いヘラケズリ、体部上半はユビオサエである。(3)は短く外反する口縁部に直立する頸部がつく。体部中位上半に最大径をもち、底部にはわずかに

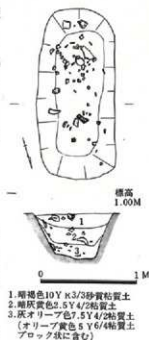


fig. 12

土坑SK501 実測図

平底を残す。外面は頸部以下全面に粗いタテハケを施したのち体部にタテヘラミガキを加える。内面は口縁部ヨコハケ、頸部から体部上半ユビオサエ、以下ナナメないしヨコハケである。(2, 3)はいずれも胎土が細かく器面がばさつく印象を受ける。

高杯形土器(4~7)は、椀状の受部(4)と脚部(5~7)が出土しているが、完形に復元し得たものはなかった。(5, 6)は挿入付加法をとり、(7)は接合法で杯部と接合する。調整はそれぞれ外面タテハケ+ヘラミガキ内面裾部ヨコハケである。

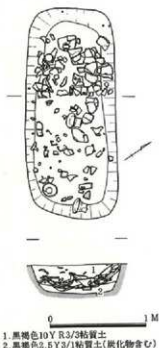
甕形土器(10, 11)は、長楕円形の体部を有し、内面をヘラケズリして器壁を薄く仕上げる。口縁部は短く屈曲し、端面をわずかに拡張する。(10)は体部中位に一部タテヘラミガキを施す。いずれも軟質で表面剝離が著しい。結晶片岩の細粒を含む。

鉢形土器(12, 13)は器高が口径に等しい形態を示す。(12)は小型品で、内湾気味に立ち上がり、口縁部は如意状に外反する。外面はハケ、内面はヘラケズリで調整する。この土器は、胎土に砂粒を多く含む。(13)も体部が内湾しながら立ち上がり、口縁部は「く」の字状に短く外反し、口縁端部を方形におさめる。外面はタタキのちタテハケで、内面はヘラケズリである。

(14)は壺形土器の体部と考えられる。体部のみが復元可能であったため頸部以上の形態ははっきりとわからないが、肩の張らない長胴の体部に対し、外上方に大きく広がる口縁を付加するプロポーションを考えておきたい。外面はタタキのちタテハケ+底部周辺の一部にタテヘラミガキ、内面は底部にタテヘラケズリを施す以外は、全面に粗いヨコないしナナメハケで調整する。胎土は砂粒を多く含む、淡路島南部産の土器と類似する。これと類似した器形が本遺跡では確認されておらず、彼の地からの搬入土器の可能性が考えられる。

溝SD501 (fig. 16~20)

調査区西半を北西から南東に向けて弧状に掘られた集落を区画する環溝と考えられる。



1. 黒褐色10Y R3/3粘質土
2. 黒褐色2.5Y3/1粘質土(炭化物含む)

fig. 13
土坑SK502 実測図

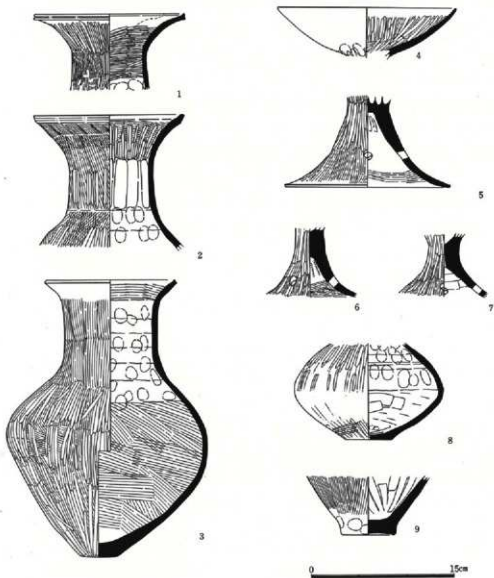


fig. 14 土坑SK502 出土土器実測図

この溝を境にして東側に集落域を想定しているが、遺構密度が、第Ⅰ～Ⅲ次調査地区ほど高いわけではない。今後、東側部分の調査結果を待って溝と集落域との関係を明らかにしたい。

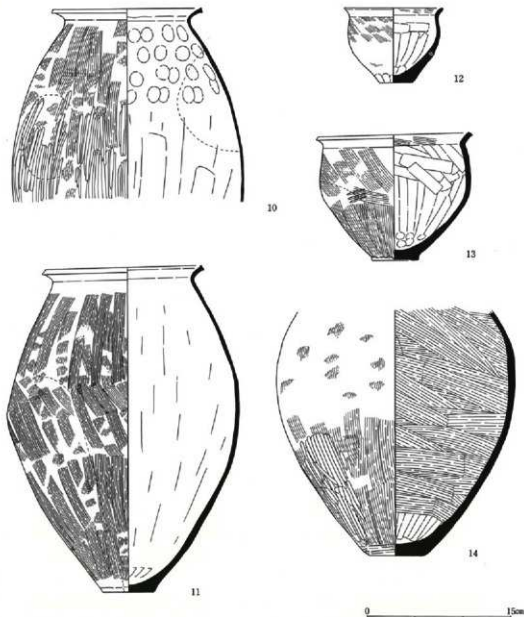


fig.15 土坑SK502 出土土器実測図

この溝は、調査区内での総延長約45m、溝幅は調査区中央部以南では約70cm、調査北端では、50cm前後の規模である。埋積土は場所によって多少差異があるが、調査区中央部より南は、大要3層に分層でき、1. オリーブ褐色砂質土 2. オリーブ黒色粘質土 3.

黒褐色粘質土となる。1層は、溝埋没を引き起こした洪水により砂の堆積で、2、3層は溝存続時の堆積土と考えられる。一方、調査区北西部は、南東部に比べて低位にあり、水位の上昇に伴って砂による埋没を繰り返していたようである。また、溝の掘りかたも明瞭でなく、暗褐色の砂質土の堆積が著しい。溝内の土器列も、原位置をとどめるものは少ない。

溝内の状況は、溝SD101の指摘したように、溝が流水機能を停止したのち、溝幅いっぱい土器を掘え置いた状況を示す。溝SD115では、一部で土器を破砕された上で投棄した様相を示す箇所があった。この溝でも、調査区北西端部分 (fig.21) で土器を破砕しての集中投棄が認められる。それ以外では、土器が溝内に正位を保って立て並べられている (fig.16~20)。完形に近い状態で出土した土器は、内部が空洞ないしは、洪水砂が入ったものがほとんどであり、埋没時まで立て並べたままの状態であったことがうかがわれる。

転倒した土器には、口縁部を北向けるものが多い。これは、上面に堆積した洪水砂 (3層) が土器列を押し倒したと解釈できよう。そのため溝内の土器群は、良好な一括資料であり得た。

以下、調査区南側より土器列の状態を復元してみる。fig.16に示したブロックでは、2個の高杯形土器 (fig.31-50, 32-57) に小型壺形土器 (fig.28-14)、甕形土器 (fig.29-32) を伴い、続いて大型の壺形土器2個体 (fig.23, 24) が、重なり合う状態で出土している。

これより北東7、8m余りの間は他所より若干高く、遺存した溝深度が浅いことから、上部が削平されていると考えられる。また、近年の河川改修に伴う攪乱坑が2箇所あり、溝を寸断している。ここでは、甕形土器がある程度のみとまりをみせている (fig.17)。讃岐系の壺形土器 (fig.30-34) が出土しており、周辺部からも讃岐系の胎土をもつ土器片が出土していることから、攪乱坑部分を含め数個体の讃岐系土器がまとまっていたと類推できる。

調査区中央に近い場所では、土器列がブロックごとのまとまりをみせている。製塩土器 (fig.31-49)、甕形土器 (fig.27-19) が散在したのち、5m余りの間に甕形土器を主体とする密集した土器列を形成する (fig.18, 19)。壺形土器 (fig.25-1) を先頭に規格のそろった甕形土器3個体 (fig.28-27, fig.29-30, 33) 列をなし、鉢形土器 (fig.31-48)、甕形土器 (fig.28-24, fig.27-16) が数個体並んだのち、再び壺形土器 (fig.25-3) が単独で出土する (fig.18, fig.22)。

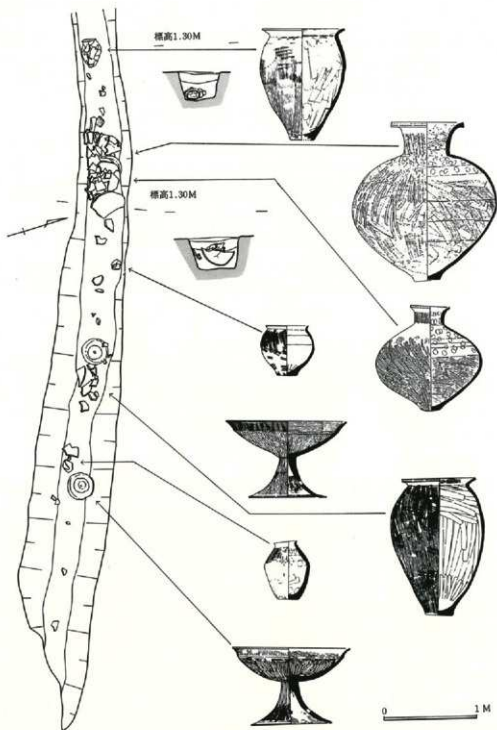


fig.16 溝SD501 遺物出土位置圖

鉢形土器 (fig. 30-43) を挟んで
 いったん土器の密度がいったん下
 がつたのち、再度
 土器が集中する。
 体部中位以下を欠
 損する大型の壺形
 土器 (fig. 26-9)
 をはじめ壺形土器
 2 個体 (fig. 26-
 10, 15) に甕形土
 器 (fig. 28-22,
 26) が数個体伴う。

これより北側
 においては、甕形土
 器の出土数が減り、
 壺・鉢・高杯形土
 器が密集せず、単
 独ないしは 2、3
 個体までの集まり
 で出土する (fig.
 19, 20)。これは、
 甕形土器が、単一
 で出土しにくく同
 一器種でグループ
 をつくるのと対照
 的である。

fig. 20 で示した
 地区では、高杯形

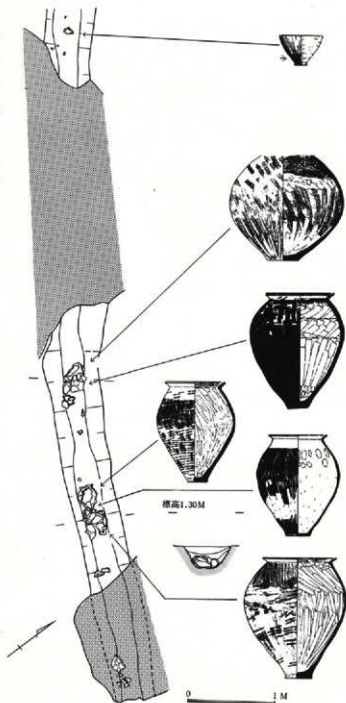


fig. 17 溝SD501 遺物出土位置図

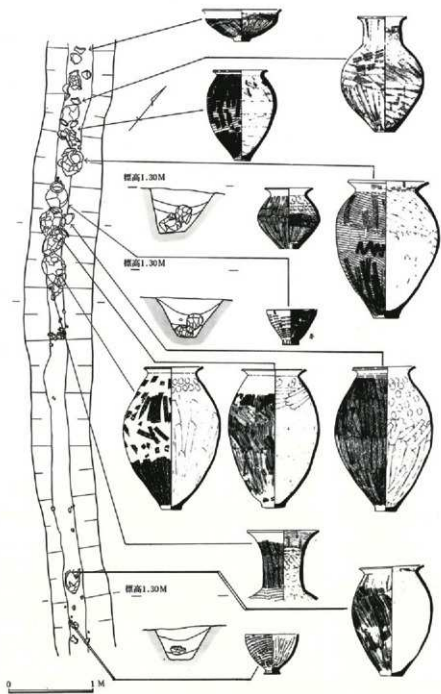


fig.18 溝SD501 遺物出土位置圖

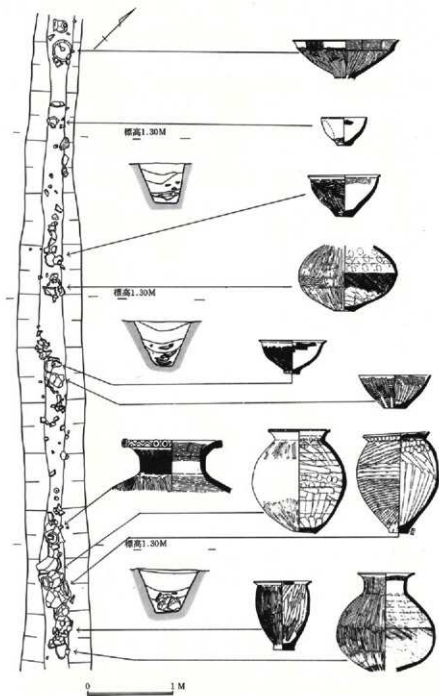


fig.19 溝SD501 遺物出土位置圖

土器が目立ち
(fig. 31-51,
54, fig. 32-55,
58, 59)、2 m
前後の間に1個
体を配置する状
況を示す。

調査区北端近
くは、先にも述
べたように安定
した遺構面が検
出されておらず、溝の掘りか
たもはっきりと
しない。fig. 21
に示したように
土器の集中する
部分では、祭祀
用と考えられる
精製の壺形土器
(fig. 25-4)、
朱の付着がみら
れる小型壺形土
器(fig. 26-13)
や鉢形土器(fig.
31-44)が完形
で出土している
反面、その他多
数出土する土器
片が、破碎され

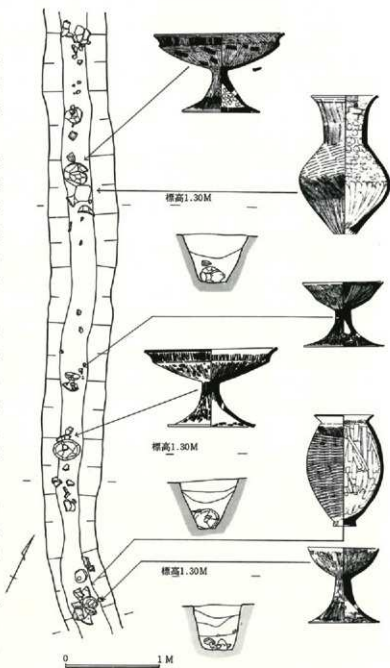


fig.20 溝SD501 遺物出土位置図

て投棄された状況を示している。この地区に限って言えば壺形土器を主体とし、土器を破砕して投入する祭りの形態を考えることができる。

以上が出土状況であるが、2、3の点について、この溝の特徴と思われることをまとめてみる。今回の溝では壺形土器は単独で出土しにくく、同一器種を含む列を形成しまとまる傾向をみせる。これは、溝SD101、SD115にも認められたことで、溝内祭祀での壺の役割を考える手がかりとなる。次に従来溝内祭祀で重要な意義をもつと考えてきた「記号文を線刻した壺形土器」が今回出土していない。部分的にしか検出してないためにもよるが、従来の出土頻度からみると出土が皆無であるのは、やや不可解である。本溝での祭祀から欠落していた可能性も考えねばなるまい。今調査においても土器列祭祀の実態は明らかにできなかつ

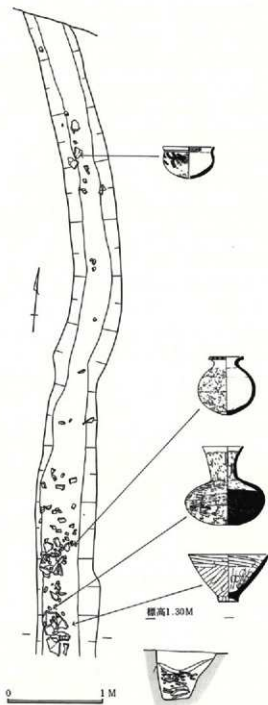


fig. 21 溝SD501 遺物出土位置図

た。部分的に検出される土器列の法則性だけから祭祀行為を類推するには無理があり、今後調査されるこの種の溝についての資料蓄積を待たねばなるまい。また、溝の使用時期の集落域を明らかにし、集落の区画と溝との関わりを考えていく必要がある。

溝SD501 出土土器 (fig. 23~32)

溝SD501では、調査が可能であった延長45m余りの間に完形品だけでも50個体を越える土器が出土している。図化し得たものでは、甕形土器が最も多く23個体、壺形土器は17個体、鉢形土器8個体、高杯形土器10個体、製塩土器1個体となる。祭祀遺構としての性格上同一器種が一箇所に集中することが予想されるため、単純に比較はできないが、溝SD101に比べて鉢形土器の比率が低い点が目につく。

壺形土器では、球形の体部に、短く直立する頸部をもち、口縁部が外反する広口壺形土器 (fig. 23, fig. 24, fig. 26-9, 10) と直立ないし僅かに外傾する長めの頸部を持ち、口縁部が外反する広口長頸壺形土器 (fig. 25-1~3) があり、前者には大型品が目につく。(fig. 23, fig. 24) は、2個が重なり合うような状態で出土した。(fig. 23) は体部中央部に最大径をもち、頸部は僅かに外傾しながら立ち上がり、口縁部は外湾して拡がる。口縁端部を若干下垂させ、端面上に2条の縦凹線を施す。外面はおおむねハケであるが、肩部周辺にタテハラミガキが加わる。内面は口縁部のミガキ、肩部のエビオサエを除きハケで調整する (fig. 24) は、大きく胴張りのした体部に対し、細めの直立する頸部をもつ。口縁部は外傾して拡がり、端面に1条の縦凹線を施す。本遺跡では多出ししない形態の

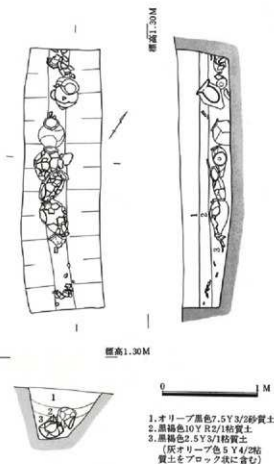


fig. 22 溝SD501 Fブロック実測図

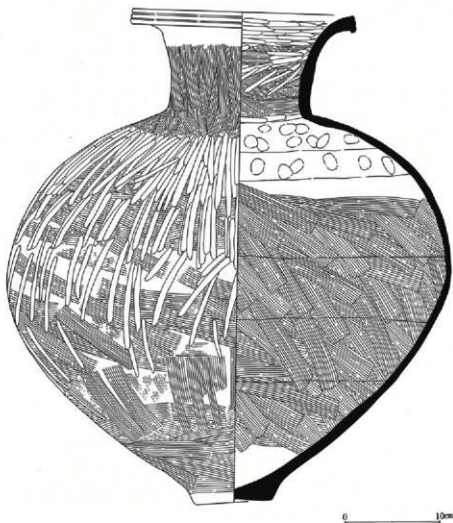


fig.23 溝SD501 出土土器実測図

ものである。

(1~3 以下図版番号を省略)は、完形の広口長頸壺である。(1、2)はいずれも直立する頸部から外反して拡がる口縁部をもち、体部は縦長の楕円形となる。口縁端部はおおむね方形におさめ、擬凹線は施さない。外面は口頸部タテハケ、体部粗いタタキのうち下半部をハケ+ヘラミガキで仕上げるが肩部周辺はタタキをそのまま残す。内面は口縁部ヨコハケ、頸部から体部上半はユビオサエで調整し、体部中位から下はヘラケズリを加える。(3)は整った縦長楕円形の体部から直線的に立ち上る頸部につながるもので、口

縁部は短く外反する。口縁端部は、上下に僅かに拡張し、一条の擬凹線を施す。外面は、口頸部タテハケ、体部タタキ+丁寧なハケを施し、内面も肩部を除いてハケで調整するなどハケを多用する。プロポーションは、東阿波型土器を形成する広口壺B3と近い要素があり、同一系譜にあると考えたい。(4)は精

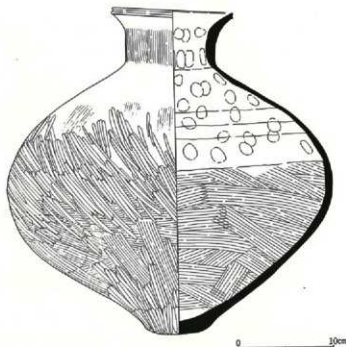


fig.24 溝SD501 出土土器実測図

製された胎土でつくられたきれいな形の細頸壺である。算盤玉形の体部に外傾して広がる口頸部をもつ。外面は入念なミガキで美しく仕上げられ、内面は頸部タテヘラケズリ、肩部ユビオサエ、体部細かなハケで調整する。器面の色調は赤く目をひく土器で、祭祀用具として特別に作られた可能性が強い。

(4~8, 11)は体部以下が残るもので、広口長頸壺の体部(5, 6)は、外面に入念なヘラミガキ、内面ケズリ、ハケで調整される。一方球形の体部をもつ(11)は、外面を断続的なハケ+部分的なヘラミガキが施されるが、調整がいくぶん雑な印象を受ける。(9)は、大型の広口壺の口頸部である。短く直立する頸部に外反して大きく開く口縁部がつながる。口縁端面上を2条の波状沈線と二個一對をなす円形浮文で飾る。

(10)は下膨れの体部をもち、直立する頸部に外湾する口縁部がつく。端部は方形におさめる。外面は頸部タテハケ、体部はタタキのらヘラミガキを全面に施す。体部内面は下位にヘラケズリ、中位にハケ、上位にユビオサエで調整する。

(13)は小型の精製された壺である。球形の体部をもち、底部はほぼ丸底となる。口頸部は丸みをもって屈曲し、短く外反する。口縁端部は、1条の擬凹線と竹管文で飾る。外

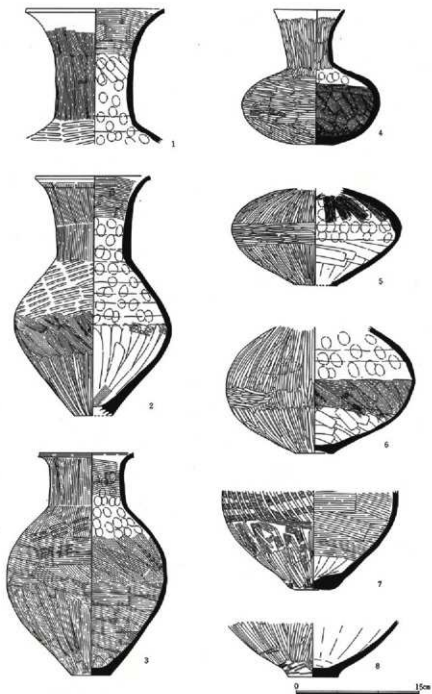
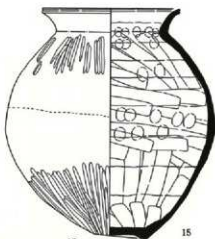
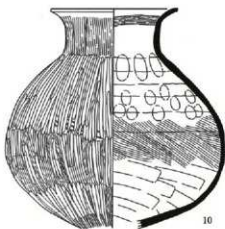
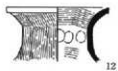
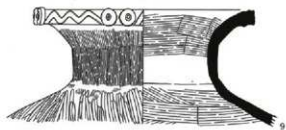


fig.25 溝SD501 出土器実測圖



0 15cm

fig.26 溝SD501 出土土器実測図

面は丁寧にヘラミガキで仕上げられる。体部に一部朱の付着が認められ、溝内祭祀を意識して作られたと考えられる。(14)も小型の壺であるが、やや肩の張る細長い体部にごく短い口頸部がつく。外面は、板ナデないしヘラミガキであり、内面には一部板ナデが看取できる。

甕形土器の形態については、調査概報Ⅰの溝SD101の分類に準拠し、一部追加補足して説明する。甕Aは「く」字状に外反する口縁部をもち、縦長の体部をもつもので、体部最大径が口径をやや凌ぐ。甕Bは、口縁部が短く外反し、体部上半が張り出すか丸みを帯びたもので、最大径は口径を凌ぐ。口縁端部については上下に拡張する。甕Cは口縁部が拡張し、肩の張ったものである。

甕A1は、甕Aのうち体部中位ないし上半に張りだした形態のもの(18, 19, 21, 23, 24, 25, 26)をいう。体部外面をタタキのち断続的なハケを施し、内面を全面ヘラケズリするもの(18, 21, 23, 24)が大半を占める。三ないし四分割のタタキで成形する。(19)は、口縁端部を僅かに積み上げ、体部は楕円形を呈す。体部外面は、上位中心にやや粗いたてハケのち中位以下を丁寧に細かなハケを加える。(24)のハケは、散発的で中位に波状のハケが施される。(26)は、体部外面四分割のタタキのままではハケをのちに施さない。底部はヘラケズリされる。口縁部はタタキ出したのちナデ、ユビオサエで形が整えられる。

甕A1'(20, 22, 28, 38)は、従来甕Aとされていたなかでも、口径と体部最大径がほぼ等しく胴張りせず、頸部でのくびれが著しくないものを新たに区別した。(20)は、頸部で緩やかにすばまり、口縁部が外反して開く。体部外面はタタキのちたてハケ、内面ヘラケズリである。内面口縁部にヨコハケ、頸部周辺にユビオサエが看取できる。(22)は、小型品で頸部の径と体部最大径がほぼ同じで、口縁部が外上方に広がる。体部外面はタタキのちハケを加える。内面はヘラケズリで、口縁部にはヨコハケで調整する。(38)は、頸部にシャープなくびれをもたず、口縁端部をヨコに積み出すようにして成形する口縁部は、頸部の上に粘土紐を貼りつけたのちタタキとナデで整える。体部外面についてはタタキのちハケないしナデ、内面幅広のヘラケズリで調整する。器壁は厚く、他の土器とは違和感がある。胎土中には結晶片岩を含んでいる。

甕A2は、口縁部が緩やかに外反し、長い体部を有す。体部中位で最大径を測り口径を凌ぐものである。このなかで体部が長胴で、内面のヘラケズリによりきわめて薄い器壁をもつものを甕A2'(27, 29, 30, 33)と区別する。甕A2(17, 32, 35)は、体部外面

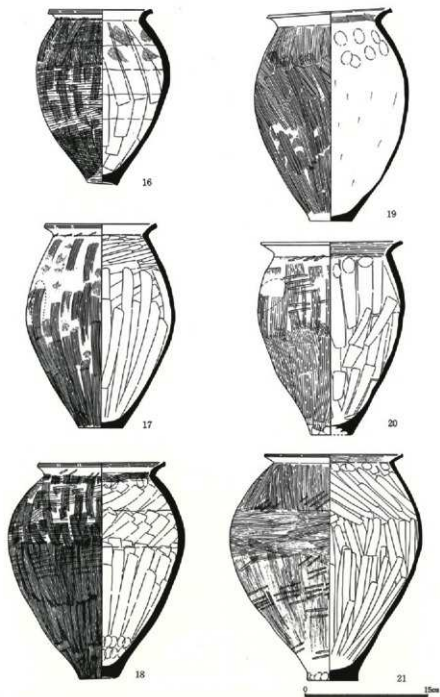
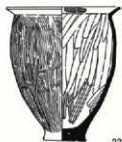
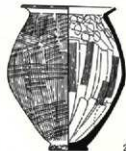


fig.27 溝SD501 出土土器実測図



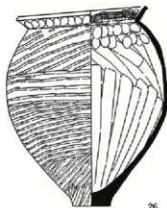
22



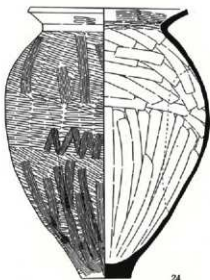
25



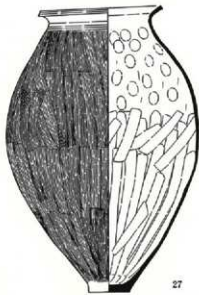
23



26



24



27

0 15cm

fig.28 清SD501 出土土器実測図

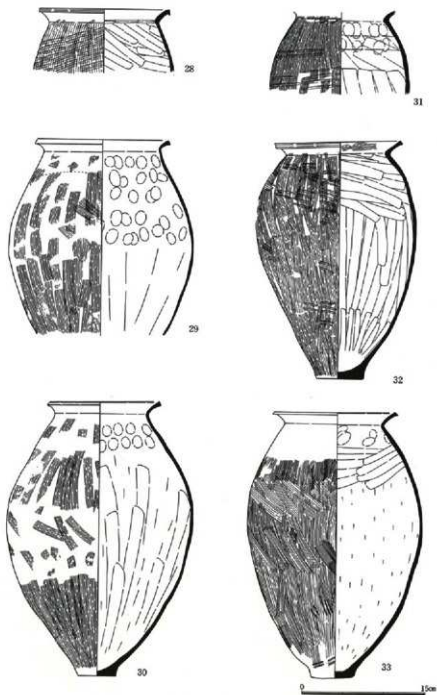


fig.29 溝SD501 出土土器実測図

タタキのちハケを施すがタタキ目を残すもの(17, 32)、体部上位の一部にハケを施すもののおむねタタキのままのもの(35)がある。(17, 32)は口縁端部を僅かに肥厚させ、端面上に弱い擬凹線を加える。(35)は上下対象な楕円形の体部に大きく突出する上げ底の底部をもつ。本遺跡では多出ししない形態である。

甕A 2'は器高32cm前後と一定の量を示す。口縁部の外反は著しくなく、やや丸みを帯びて外上方に立ち上がる。口縁端部は僅かに下方に拡張し、弱い擬凹線を加えるもの(27)、ナデを併い上方にはね上げ気味におさめるものなど細部での特徴は一定ではない。体部外面は細かいタタキのち丁寧なタテハケ、内面ヘラケズリで上位にユビオサエを加える。器壁を薄く仕上げるといったテクニックは、黒谷川Ⅱ式以降成立をみる東阿波型土器と変わらない。甕A 2'は、従来黒谷川Ⅰ式段階の一括資料としてきた溝SD101、溝SD115の土器にはあまり認められなかったが、溝SD117出土土器に同一の形態の甕を見いだすことができる。今回溝SD501、土坑SK502から多く出土しており、黒谷川Ⅰ式のやや新しい段階において多出する形態と考えたい。

甕B(16)は、口縁端部を上下、特に下方に拡張する。体部は丸みを帯びてはいるものの、さほど胴張りしない。口縁端面には1条の擬凹線をとどめる。体部外面は、四分劃のタタキのちハケを施すが、中位のハケはまばらである。内面はやや幅広のタテヘラケズリで、肩部に散発的なハケが看取される。底部は僅かな上げ底である。

甕C(34)は、暗茶褐色を呈し、硬質のいわゆる讃岐系の土器である。口縁部は、短く「く」の字状に外反し、東阿波型土器の口縁端部のテクニックと同様に上方に僅かに摘み上げる。体部は肩が張る讃岐系土器の特徴をみせるが、溝SD101で出土した讃岐系土器に比べ若干新しい様相を示し、黒谷川Ⅱ式併行期と考えられる土坑SK133出土壺形土器に近い形態をとる。これはこの溝の時期が、従来の黒谷川Ⅰ式の指標としてきた溝SD101より新しいと判断する根拠となる。

鉢形土器も従来同様、内湾気味に体部が立ち上がるもの(鉢A)と口縁部が外反するもの(鉢B)がみられる。

内湾気味に立ち上がる体部をもつ鉢A 1(41)は、口縁端部を丸くおさめ、外面はタタキのちヘラミガキを施し、内面はヨコハケのち下半はヘラミガキで調整する。

半球状の体部をもつ鉢A 2(46)は、小型で底部が僅かに突出する。口縁端部を丸くおさめ、外面タタキのちナデで摺り消し、内面ハケのちナデである。

体部が直線的にのびるタイプの鉢A 3(44, 47, 48)がある。(44)は、突出する上げ

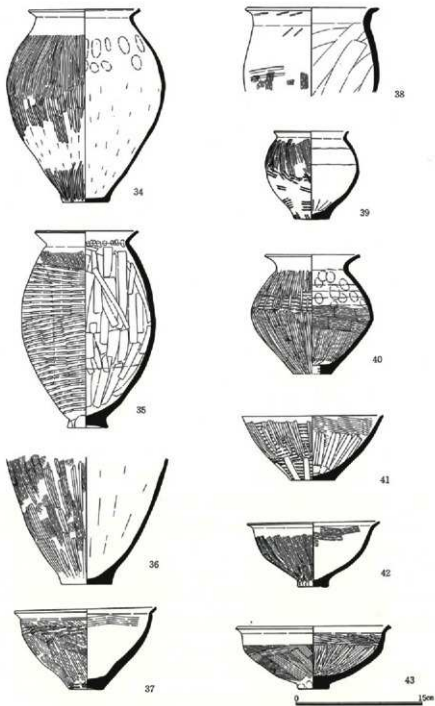


fig.30 溝SD501 出土土器実測図

底をもつ。外面はタタキののちナナメ方向の板状の工具でケズリ（ナデ）で器面を整えているが、同様の調整を施すものは、多ししない。(48)は、突出する上げ底で外面タタキ＋口縁部ナデ、内面蜘蛛状のハケ目を残す。(47)僅かに口縁部で内湾し、鉢A1との中間形態である。外面ユビオサエナデ、内面ヘラミガキで調整する。二次焼成を受け器壁が変色している。今回は鉢として報告するが、製塩土器の可能性も示唆しておく。

鉢B1としている口縁部の外反が緩やかなもの(43)は、体部から口縁部にかけて緩やかな「S」字状となり、口縁部をやや肥厚させる。底部は突出した平底である。外面はタテ、内面は入念なヘラミガキを施す。

鉢B2は内湾して立ち上がり、口縁部が外反するタイプ(37, 42)である。(37)は外面タタキののちタテハケを加えるが、タタキ目を残している。(42)は内外面ともハケで調整する。

(45)は強く内湾して立ち上がり、甕の頭部のようにくびれをもち、外反する口縁部につながる。従来類似の器形が出土していなかったため、新たに鉢B3と区別する。外面頸部に2条の並行沈線を施し、体部はハケ、底部はヘラケズリし、僅かに尖り気味の丸底を形成している。内面は口縁部ヨコハケ、体部ナデである。

(49)は製塩土器で、突出した底部をもち、内湾して立ち上がる。外面はタタキ、内面はヘラミガキで調整する。器壁は二次焼成により変色しており、一部はがれ落ちている。本遺跡では、製塩土器は、第Ⅱ次調査の井戸SE101や包含層から少量出土している。

高杯形土器(50~59)も溝SD101出土土器の分類同様に杯部の形状で2種類に大別できる。高杯A(53, 54, 58)は杯部が碗形のものである。杯部と脚部との接合法はいずれも挿入付加法をとり、杯部内外面をヘラミガキし、脚部は外面ハケ＋ミガキ、内面ハケで調整する。杯部の深さは、浅いもの(53)深いもの(54)で若干の差はみられるものの、溝SD101の土器に比べ、内湾度が増し深さもあるため、微妙な時期差を示すものと考えられる。

高杯B(50~52, 55, 57)は杯部が屈曲して外反タイプである。杯部の形状は内湾するもの(50)から直線的に外傾するもの(55)までかなりの差がある。(50, 52)は内外面とヘラミガキの調整が卓越し、口縁部、脚部部にハケが看取される程度である。(51)はハケのちミガキを施すが、密度が低くハケ目を多く残す。(55, 57)は杯部があまり内湾せず上方に開き、口縁部の屈曲の度合いにも少ない。口縁部と脚部部にハケ調整を加える以外は、タテヘラミガキである。高杯Bの形態において、溝SD101出土のものに比べ

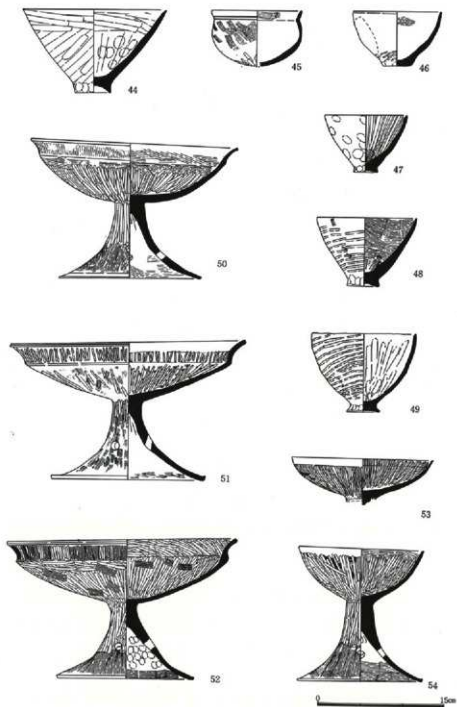


fig.31 清SD501 出土土器实测图

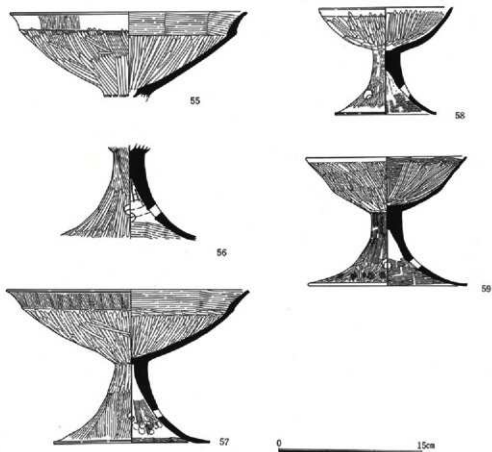


fig.32 溝SD501 出土土器実測図

かなりの変化がみられる。全体に占める杯部の大きさ（深さ）が増し、脚柱部の直立部分が短くなり、口径が器高を凌駕する。

（59）は杯部中位付近で僅かに屈曲し、外上方に拡がる。脚部は発達し口径と脚径はほぼ等しい。プロポーションは、第Ⅱ次調査土坑34出土の高杯にやや類似する。杯部の中で受け部の占める割合が減少する傾向は、黒谷川Ⅱ式以降顕著となると考えられ、この溝で出土した高杯では、新しい要素をもつものと考えられる。

溝SD501 出土土製品・石製品 (fig. 33)

紡錘車（1）は、直径6.0cmの円形で、最大厚1.0cmである。中央に直径6mmの孔を穿つ。

器面にユビオサエが看取できる。

打製石包丁(2)は、紅泥片岩製で、現長7.6cm、最大幅4.4cm、最大厚5mmである。両側面にわずかにえぐり込みを入れる。

砥石(3)は、乳白色を呈し、石材はリュウモン岩である。現長17.0cm、最大幅9.0cm、最大厚4.8cmである。A面側には、研磨痕が明瞭に看取され、B面側にも若干研磨痕が認められる。

溝SD501 上層出土土器

(fig. 34)

溝内埋積土のなかでも洪水に起因する砂層(3層)に混入していた土器で、土器列を構成する土器が押し流された可能性も残すが、混入したものと判断し、溝上層の土器として区別する。

広口壺形土器(1)は、体部中位が大きく膨らみ、頸部は直立し、口縁部は大きく外反する。口縁端部を下方に拡張して、端面上には1条の擬凹線を施す。プロポーシオンは、黒谷川Ⅲ式の壺B3と類似し、同一系譜上にあると考えられる。器面調整は、体部外面はハケが卓越し、底部を幅広のヘラ原体でナデ上げ、中位下半を断続的なヘラミガキを加える。体部内面は、ヘラケズリが中位までは及んでいたと考えられ、その上をヨコないしナメハケを加える。内面体部上位にはユビオサエ、口縁部はヨコハケを加える。

甕形土器(2, 6)は2点図化し得たが、(6)は口縁部に特徴をもつ土器である。体部中位よりやや上方に最大径をもち、「く」字状に外反した口縁は、受口状に屈曲して立ち上がる。体部外面は分割タタキのちタテハケ、内面はハケのちヘラケズリである。このよ

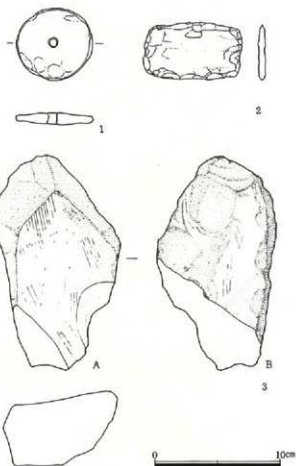


fig. 33 溝SD501 出土土器・石製品

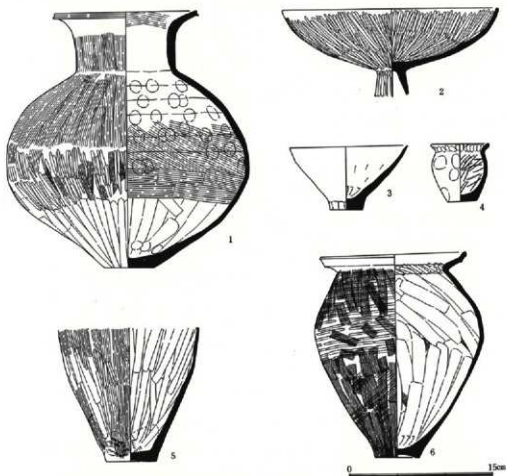


fig.34 溝SD501 上層出土土器

うな受口状の口縁をもつものは、弥生時代後期中葉の紀伊系壺形土器の特徴であり、和歌山県船岡山遺跡などで年代観が示されている。この受口状壺形土器は、河内などへ搬出されており、本遺跡に搬入されても不自然ではない。胎土中に結晶片岩を含み、鮎喰川流域の土器の胎土からは判別できないが、紀ノ川流域よりの搬入品と理解したい。

高杯形土器（3）は、碗形の杯部をもち、中空脚を接合法で杯部と接合する。内外面ともヘラミガキで調整される。

鉢形土器（4）は、ほぼ直線的に外傾して立ち上がる。外面ナデ、内面ハケののちナデを加える。

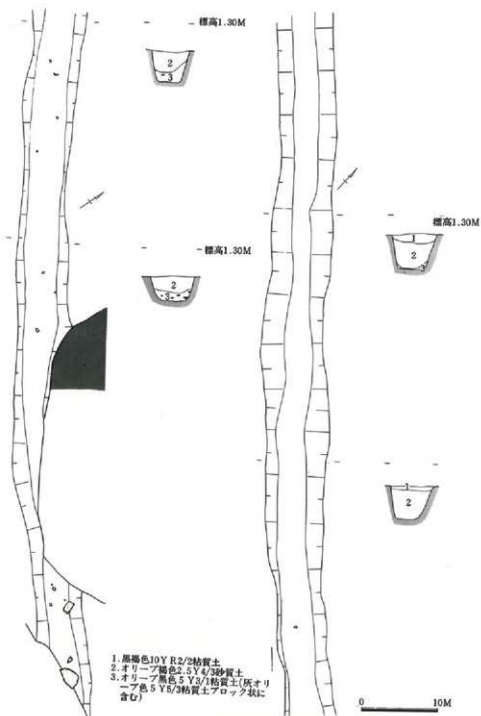


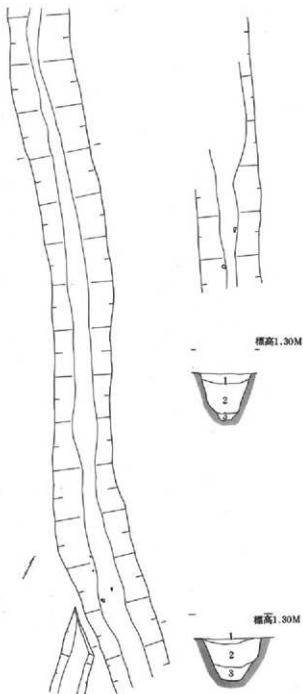
fig.35 溝SD502 実測図

ミニチュア土器(5)は、手づくねで成形する。内面にへら状工具による粘土掻きあげの痕跡がみられる。

溝SD502 (fig. 35, 36)

溝SD501と3m前後の距離をあけて、平行して掘削された環溝である。総延長は約30m、幅は70cm~1m、深さ50cm前後である。埋積土については、溝SD503 合流部分付近を境に多少土質に差がある。南半分では1. 黒褐色粘質土 2. オリーブ褐色砂質土 3. オリーブ黒色粘質土の順に堆積するが、北半部では1. 黒褐色砂質土 2. 暗緑灰色砂質土 3. 黒褐色粘質土となる。2. 3層は土色に差はあるものの対応する層と考えられ、3は溝使用時の堆積土、2が溝SD501にも認められた洪水による埋没土と判断できる。1は、洪水埋没後溝の痕跡の窪みに堆積した土砂であるが、北半部はレベル的に南に比べて低位にあり、砂層の堆積がみられる。

遺物は、遺構の規模のわりにきわめて少なく、土器の細片がわずかに出土したにすぎない。溝SD501が溝に多数の土器を立て並べていた状況とは対象的である。溝SD501が「祭りの溝」であったのに対し、こ



1. 黒褐色5YR3/1粘質土 2. 暗緑灰色7.5GY3/1粘質土
3. 黒褐色10YR3/1粘質土(灰オリーブ色5Y5/3粘質土ブロック状に含む)

fig.36 溝SD502 実測図

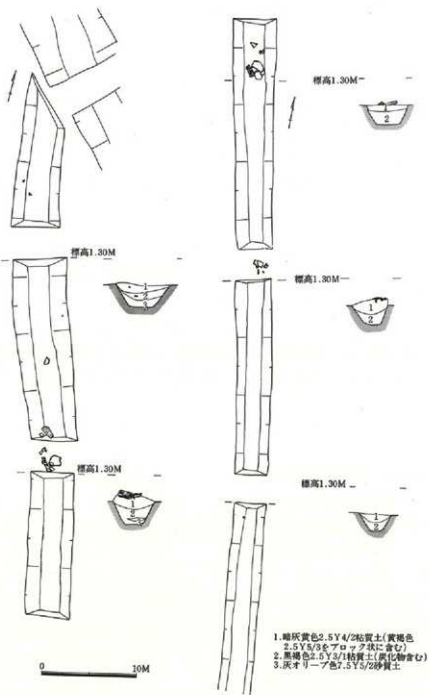


fig.37 溝SD503 実測図

の溝は多少なりとも溝本来の流水機能をはたしていたと思われる。

溝SD503 (fig. 37)

調査区南西部を南北方向に掘削し、SD502と合流する溝である。検出部分での総延長は12m余り、幅40~50cm、深さ約30cmである。断面は逆台形を呈す。埋積土はおおむね2層に分けられ、1. 暗灰黄色粘質土 2. 黒褐色粘質土である。2層は溝が機能していた時点での埋積土である。この溝と溝SD502との関係は、切り合うのではなく、同時期に合流させることを意図して作られたものと考えられる。

溝SD503 出土土器 (fig. 38)

この溝も溝SD502同様土器をあまり含まず、図化できたのは2点のみであった。

壺形土器底部(1)は、やや突出する底部をもち、体部は算盤玉形を呈する。外面は原形幅の広いヘラミガキ、内面は板ナデである。

鉢形土器(2)は、鉢B3に該当するもので、深鉢状をなし内湾気味に立ち上がり、口縁部を短く屈曲させる。底部は突出して上げ底になる。外面はタタキののち幅広の粗いタテハケ、内面はヘラケズリないし板ナデで調整する。

建物跡SA501 (fig. 39)

溝SD501の東側に接近して確認された掘立柱建物跡である。桁行方向を北東-南西にもち、梁間1間、桁間3間である。梁間は3.3m、桁行はP7-P8間がわずかに狭く1.5mであるが、他はおおむね1.6mを測る。各柱の直径は35cm前後の円形である。柱穴の深度は多少ばらつきがあるが、25cm~40cmを測る。柱穴内は黒褐色粘質土で充填されているが、遺物はほとんど出土していない。時期的には、住居跡SB501

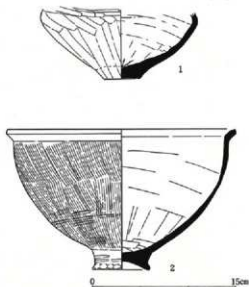
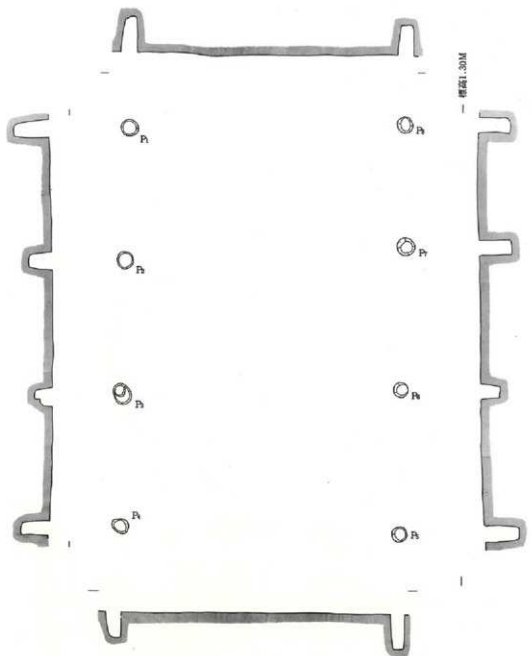


fig. 38 溝SD503 出土土器実測図



建物跡 SA501 実測図

0 ————— 2 M

fig.39 建物跡SA501 実測図

と併存していたと考えられ、黒谷川Ⅰ式（新相）併行期のものである。環溝と考えられる S D501, 502の内側にあるが、集落域縁辺部に位置する倉庫的な建物であろう。

第1遺物包含層出土土器 (fig. 40)

従来包含層としてきた弥生時代後半～古墳時代初頭の遺物を主体とする黒褐色粘質土層である。広口壺形土器（1）は、溝 S D501上層出土の広口壺形土器（fig. 34-1）と類似した形態を示す。直立する頸部と屈曲して大きく外反する口縁部をもち、体部は胴張りして中央部で最大径をもつ。口縁端面は上下に拡張し、端面上に一条の擬凹線を施す。外面

は頸部タテハケ、体部タタキをハケ+ヘラミガキで消す。内面は、口頸部ヨコヘラミガキ、体部上半ユビオサエ、中位にヨコハケ、下半はハケのちタテヘラケズリで調整する。黒谷川Ⅰ式（新相）のものと考えられ、東阿波型土器を構成する壺形土器B3の系譜上にあり先行する形態にあたる。

小型丸底鉢（2）は底部に平底を残し、頸部には沈線をもち、外上方に広がる。底面は体部ユビオサエ+タテハケで一部にヘラケズリで

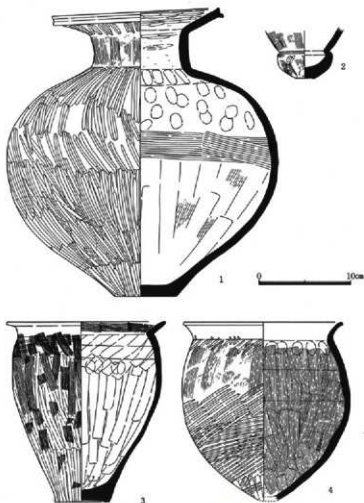


fig. 40 第1遺物包含層出土土器

調整する。黒谷川郡頭遺跡出土の同器種では、もっとも古い形態を示し、黒谷川Ⅱ式古段階の所産と考えられる。

菱形土器(3, 4)は、時期に違いがある。(3)は口径と体部最大径がほとんど等しく、今回溝SD501出土土器で獲したタイプである。黒谷川Ⅰ式(古相)のものである。体部外面はタタキのちヘラミガキを行い、肩部から胴部にかけて散発的なクテハケを加える。内面については、口縁部ヨコハケ、体部クテヘラケズリ+一部ユビオサエで調整する。

(4)は、やや尖り気味の底部をもつ。外面は全面に右上がりのタタキを施し、部分的にクテハケを加える。内面は

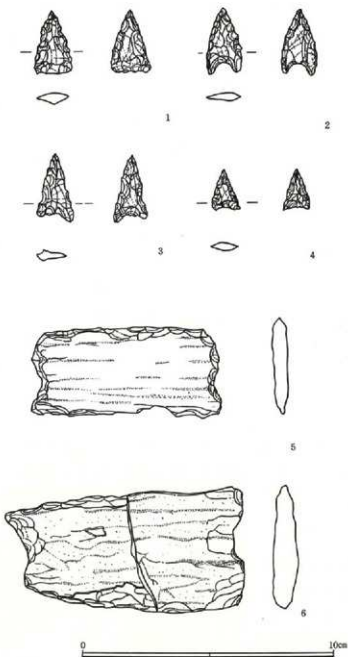


fig.41 第1遺物包含層出土石器実測図

丁寧なハケで調整する。これは、黒谷川Ⅲ式段階で見られる畿内第Ⅴ様式系のプロボーションを引き継ぐタイプである。SE101出土土器の分類では、ⅡBとして東阿波型のⅡに少量混って出土する。胎土は結晶片岩を顕著に含み、鮎喰川下流域産の土器である。

第1遺物包含層出土土器 (fig. 41)

今調査区内では、包含層中からサヌカイト製石織が4点 (fig. 41-1~4) 出土しておりサヌカイトのチップもかなりの量認められる。石織はいずれも無茎織であり、丙基のもの(1)と凹基のもの(2~4)がある。

打製石包丁は、結晶片岩の片理にしたがって薄板状に割り、さらに両側を刃部をつけた吉野川流域で通常みられるもの(5)と第1回の打割りで得られたへりの部分を加工して刃部に利用したもの(6)がある。いずれも両側部にえぐりをもつ。分量は、(5)が原長9.4cm 最大幅3.8cm 最大厚6mm、(6)が現長9.4cm 最大幅4.9cm 最大厚1.0cmである。

§2 第2遺構面の遺構と遺物

本遺跡では、従来黄褐色の粘質土を地山と判断し、そこで検出される弥生時代後期後半から古墳時代初頭にかけての遺構面を最終検出面としてきた。ところが、今回の調査では第1遺物包含層(従来の包含層)から弥生時代前期と考えられる土器片や細片ではあるが突帯文をもつ縄文晩期に遡り得る土器の混入がみられた。そのため、第1遺構面検出後、その下層にある灰オリーブ色粘質土(第2遺物包含層)を除去し、再度遺構検出につとめたところ、この面で弥生時代前期から中期初頭の遺構が確認された。従来の時期の遺構面を第1遺構面、この面を第2遺構面として区別する。

確認された遺構は、土坑5基である。いずれも遺構深度が浅く、上面を削併されていると考えられる。

土坑SK511 (fig. 42)

調査区東縁部に位置する直径1.2m前後の円形の土坑である。現存する深さは、5~10cm程度で、浅い皿状を示す。この土坑の平面プランは、第1遺構面検出時に上面を削平された状態で確認されたため、本来はもう少し深いものであり、底部分のみ検出されたと理

解できる。遺物は底に張りついた状態で出土している。
弥生時代前期新段階のものである。

土坑SK511 出土土器 (fig. 47-2~5)

壺形土器(2)は、緩やかに外湾して広がる口縁部をもち、頸部には、幅広の貼りつけ突帯の上に一条の沈線+刻み目を施す。頸部以下の部分を欠損するため多条の貼りつけ突帯をもつものか否かはわからない。外面は細かいタテハケのちヨコヘラミガキ、内面はヘラミガキ+ナデで調整する。

壺形土器(3)は、如意状の口縁形を示し、口縁端面に刻みを入れ、頸部を3条の沈線で飾る。底部(4、5)はいずれも壺形土器と思われる。(5)は細かいタテハケが看取できるものの表面刻離は著しい。

壺形土器の特徴だけからは、時期の判断は難しいが、壺形土器に張り付け突帯をもつことなどから弥生時代前期新段階のものと理解できる。

土坑SK512 (fig. 43)

土坑SK511のわずかに北側で検出された楕円形の土坑である。長軸90cm、短軸60cm、深さ25cmを測る。埋積土は3層に分けられ、上層より1. 黒褐色粘質土 2. にぶい黄褐色粘質土 3. 灰オリーブ色粘質土である。土器は3層の上面に張りついた状態で検出された。土坑の性格は不明である。弥生時代前期新段階の所産である。

土坑SK512 出土土器 (fig. 47-8~10)

壺形土器口縁部(9)は、短く外方に湾曲する。端面には刻み目、頸部には二条のヘラ描き平行沈線を施す。外面は左上がりの断続的なハケ調整を行う。壺形土器底部(10)は、かなりの大型品であるが、体部全面を断続的なタテハケで調整する。壺形土器を伴わず、時期判断は難しく弥生時代前期新段階の範囲でとらえておきたい。

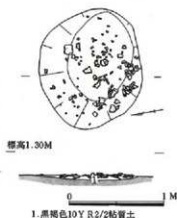


fig.42 土坑SK511 実測図

土坑SK513 (fig. 44)

調査区ほぼ中央で検出された浅い落ち込みである。直径2.5m前後のいびつな円形の平面プランを呈する。埋積土は、1. 黒褐色粘質土 2. 灰色粘質土である。当初1層を弥生時代前期の湿地性の堆積層と判断し、自然の落ち込みとして処理していたが、その下層に前期の遺物を含む2層が確認され明瞭な掘りかたをもつため土坑と認定した。断面は7~10cmの深さで落ち込んだ後、中央部に向かってなだらかに窪み、最深部で15cmを測る。



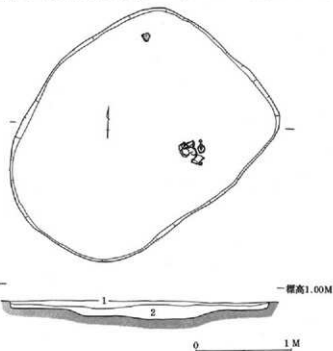
1. 黒褐色10Y R3/2粘質土
2. ぶい黄褐色10Y 4/3粘質土
3. 灰オリーブ色 5 Y5/2粘質土

fig. 43 土坑SK512 実測図

土坑SK513 出土土器 (fig. 47-6, 7)

鉢形土器(6)は、外反する口縁をもつもので、体部は内湾して立ち上がる。いわゆる深鉢の形状を示す。口縁端面上に刻み目を施し、頸部に一条のヘラガキ沈線を加える。体部外面はタテハケ、口縁部内面にヨコハケで調整する。口縁内面に施されたヨコハケは、多用されるものではない。

壺形土器底部(7)は、外傾して積み上げる粘土紐の痕跡を明瞭に残す。外面を6条/1cmのタテハケを施したのち底に近い部分について密度の高いナメヘラミガキを加える。内面は丁寧なナデで調整する。



1. 黒褐色10Y R3/1粘質土 (少量のマンガン含む)
2. 灰色10Y 4/1粘質土 (少量の鉄分, マンガン含む)

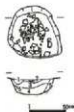
fig. 44 土坑SK513 実測図

土坑SK514 (fig. 45)

第IV次調査区に接する

部分で検出された台形の平面プランの土坑である。テストトレンチ掘削中、土坑上面を若干削平した段階で確認された。埋積土は、1. 緑灰色粘質土、2. 黒褐色粘質土、3. 緑灰色粘質土、4. オリーブ灰色粘質土、5. 緑灰色粘質土である。遺物は、4層中で弥生時代中期初頭の壺形土器片が出土している。

この土坑周辺は、調査区東側に比べて低湿であり、第2遺物包含層が途切れて緑灰色のグライ化の進んだ粘質土がひろがっているため生活空間としての条件は悪かったと考えられる。単発的に検出された遺構であり、性格もいまひとつ明らかにし得なかった。



1. 緑灰色粘質土(5Y5/2粘質土(黒オリーブ5Y4/2粘質土を含む))
2. 黒褐色粘質土(5Y3/1粘質土)
3. 緑灰色粘質土(5G Y4/粘質土(黒オリーブ5Y4/2粘質土を含む))
4. オリーブ灰色粘質土(5Y5/2粘質土(黒オリーブ5Y4/2粘質土を含む))
5. 緑灰色粘質土(5G Y4/粘質土(黒オリーブ5Y4/2粘質土を含む))

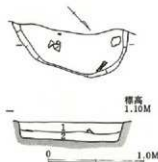
fig.45
土坑SK514 実測図

土坑SK514 出土土器 (fig.47-1)

壺形土器の体部がかなり大きな破片で出土しているが、実測し得たのは、広口壺形土器口縁部 (fig.47-1) 一点のみであった。(1) は大きく外反する口縁部をもち、口縁端面上には、深い一条の沈線をひき、さらにその上に刻み目を施す。この施文は、河内などで第Ⅱ様式初頭に盛行している。外面は、6条/cmのタテハケを施し、頸部にヘラないしは半藪竹管の沈線が一条のみ看取できる。体部は接合し得ないが、肩の張った胴部をもつ丈高のものと考えられる。

土坑SK515 (fig.46)

この土坑は、溝SD501に切られていた。溝SD501検出時に壁面に焼土が確認されたため、当初は溝SD501の溝内祭祀に伴うものと考えていたが、第2遺構面まで掘り下げた段階で平面状の広がり方が確認されたため、弥生時代前期～中期初頭の時期にあたる遺構と判明した。遺存していた土坑の平面プランは、長軸1.2m前後のいびつな楕円形である。埋積土は、1. 灰オリーブ色粘質土、2. 灰オリーブ色粘質(炭化物・焼土多量を含む)で、2層において厚い焼土層を形成している。この焼土



1. 灰オリーブ色5Y4/2粘質土(焼土をブロック状を含む)
2. 灰オリーブ色7.5Y5/2粘質土(炭化物を含む、焼土層)

fig.46 土坑SK515 実測図

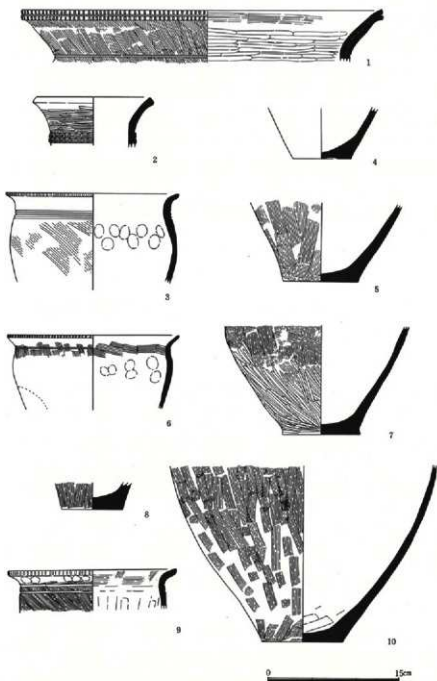


fig.47 第2遺構面各遺構出土土器実測図

の状態からかなりの期間強い火をつかっていたと推測される。二次焼成を受け器種等識別不能な土器片が、2層上面から出土している。

この土坑の性格は、屋外炉や祭祀遺構などが想定されるが、焼土中ないしは上面に炭層の形成が認められず、炉としては疑問点が残る。

第2遺物包含層出土石製品 (fig. 48)

石皿(1)は、砂岩製で、現長28.5cm 最大幅18.7cm 最大厚8.9cmを測る。A面、B面ともにわずかながら敲打痕を残す。

石棒(2)は、結晶片岩製である。直径5.5cmの円柱状をなし、先端部は尖らせる。現存長は18.7cmであるが、明らかに製品を叩き折っている。

石杵(3)は、先端部を蛤刃状におさめ、当初は磨製石斧として作られたものがのちに杵に転用されたと考えられる。先端部の本来の刃先打撃と摩擦により潰れている。側面には手ずれの痕跡が残る。現長11.0cm 最大幅6.1cm 最大厚4.4cmを測る。石材は、センリョク岩である。

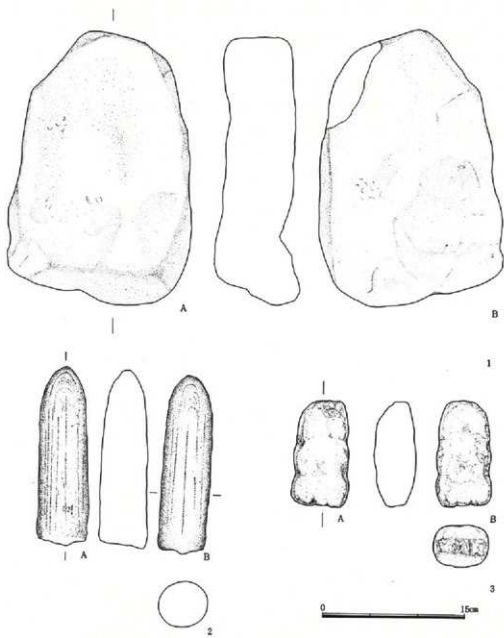


fig.48 第2遺物包含層出土石器

IV. まとめ

黒谷川郡頭遺跡は、第V次調査までを終了した。これまでに調査を終えた部分は、大きく2つに分けられる。一方は第I～III次調査対象地であり、竪穴住居跡21棟・掘立柱建物跡3棟・方形周溝墓1基・環状祭祀溝2条をはじめとして溝・土坑が密集して検出された。ここでの遺構は時期幅があり、黒谷川I式（古段階）からIV式まで継続的に集落が営まれていたと理解される。もう一方は、第II次調査区から東に200～250m離れた第IV、V次調査対象地である。前者に比べ遺構密度が低く、竪穴住居跡2棟・掘立柱建物跡2棟・大溝2条・環溝2条と数基の土坑が確認された程度である。検出された遺構は弥生時代後期（黒谷川I式）の範囲で納まるものである。

個々の遺構については、既刊の調査概報で説明してきたが、これまで5回の調査をふりかえり土器の編年観と各遺構の年代を再確認していくことにする。

遺跡の変遷の再確認

調査概報IIにおいて、第I、II次調査で検出された各遺構の年代を示しているが、第III次調査以降の遺構についても年代を整理することにする。ただし後述するように土器の編年観に若干の相違が生じてきたため調査概報IIのものとは異なる点がある。なお便宜上第I～III次調査区をA地区、第IV～V次調査区をB地区と呼ぶことにする。

〈第I～III次調査区（A地区）について〉

黒谷川I式（古相）

土器列祭祀を行なう環状溝が掘り込まれ、本遺跡の開始時期にあたる。溝SD101(117)、SD115、SD116、SD123が該当する。

黒谷川I式（新相）

住居跡SB107、SB108、SB308、土坑SK101、SK304が該当する。住居跡はこの段階から増加し、いずれも円形の平面プランをもつ。朱精製については、この段階までは通り得る。

黒谷川II式（古相）

住居跡SB102、SB304が該当する。住居跡は相変わらず円形の平面プランを呈し、溝

造上Ⅰ式（新相）とはなんら変化は認められない。

黒谷川Ⅱ式（新相）

住居跡SB106、SB110、SB305、SB306、SB307、SB310、土坑SK106、SK127、SK305、SD119（301）、SD122（302）、建物跡SA103が該当する。集落内で住居跡が密集して検出され、その平面プランも円形から隅円方形でベッド状遺構を有するものへと変化する。また住居跡が、朱の精製工房の性格を明確と示すもの（石臼・石杵等の工具を伴う）が大部分になり、本遺跡の最盛期となる。新たに環状溝SD119（301）、SD122（302）が設けられる。

黒谷川Ⅲ式

住居跡SB105、SB112、SB309、土坑SK106、SK109、SK113、SK126、SK129、SK134、SK307、井戸SE101、建物跡SA104が該当し、溝SD119（301）、SD122（302）も継続して使用されている。Ⅱ式（新相）に引き続いて本遺跡の最盛期であり、典型的な東阿波型土器が出土する。

黒谷川Ⅳ式

土器編年上、従来黒谷川Ⅲ式の範囲でとらえていたうち新しい様相をもつものをⅣ式として区別した。該当する遺構は、住居跡SB109、SB301、土坑SK302、SK303、方形周溝墓2号墓域である。調査区全域で遺構密度が低下し、溝SD119（301）、SD122（302）も埋没する。調査対象地で検出された集落の解体時期に近いと考えられる。

〈第Ⅳ、Ⅴ次調査区（B地区）について〉

黒谷川Ⅰ式（古相）

住居跡SB401、建物跡SA401、土坑SK401、SK402、SK403、大溝SD401、SD402と第Ⅳ次調査で検出された遺構が該当する。本遺跡で確認された遺構のなかでは、もっとも古いと考えられる。

黒谷川Ⅰ式（新相）

住居跡SB501、建物跡SA501、土坑SK501、SK502、溝SD501、SD502、SD503の第Ⅴ次調査で検出された遺構が該当する。環状の溝が掘られ、集落が営まれはじめる。調査対象地は集落の中心からはずれたためと考えられるものの、西の集落のように複数の時期の遺構の重なりは認められない。

本遺跡は、黒谷川Ⅰ式段階にS D101 (117)、S D115、S D116、S D501といった土器列祭りを伴う環溝の開掘を皮切りに開始する。また低湿地で集落を営む上で不可欠たる水対策と集落区画を意図した大溝S D401、S D402も設けられる。

本遺跡を特徴付ける朱の精製は、Ⅰ式(新相)には開始されたと推定され、工房と考えられる円形住居跡が精製用具を伴って検出されている。Ⅱ式(古相)は、Ⅰ式(新相)の集落形態の延長線上に存続する。B地区の集落は、この段階以降存続していない。

Ⅱ式(新相)において、A地区の集落は変貌をとげる。S D119 (301)、S D122 (302)の新たな環溝が掘り込まれ集落が再構成される。住居跡の平面プランは、円形に変わり隅円方形が一般的となる。朱の精製活動も前段階に比べ活発になったものと推察できる。集落の活況と歩調を合わせるように東阿波形土器の成立が認められる。

Ⅲ式段階においても遺構密度は維持されたままで、前段階の集落の枠組みが維持されていると考えられる。井戸S E101の一括資料に代表される典型的な東阿波型土器が多数出土する。この段階の土器は、遠く紀伊水道、大阪湾、東部瀬戸内海を越え拡散しており、本遺跡が他地域との交渉を盛んにもっていたことを示している。⁽²⁾

Ⅳ式段階になるとA地区の集落にも陰りが見え始める。集落を区画していた溝S D119 (301)、S D122 (302)が埋没し、遺構数も減少する。住居跡S B109が現在確認されている最も新しい朱の工房である。

住居跡の変化について

調査概報Ⅱでは、住居跡の平面プランが円形から隅円方形への変化する時期を黒谷川Ⅱ式(小型丸底鉢の成立時期)頃ととらえた。この指摘は概ね間違いないことであるが、土器編年の見直しに立ち再度検証することにする。

tab. 1は、検出された住居跡を一覧表にしたものである。黒谷川Ⅰ式(新段階)からⅡ式(古段階)にかけては、全ての住居跡が円形ないし円形にきわめて近い多角形の平面プランをもつ。また長方形の張り出し部分を設けたものが、住居跡S B102、S B103、S B106、S B501とかなり普遍的に見られる点は注目される。同様の構造をもつ竪穴住居跡は、香川県下川津遺跡S H8733、S H8735などにみられ、今後類例が増えることが予想される。⁽³⁾

主柱は4～6本の主柱を同心円の上に配し、さらに床中央部に柱を設けている。柱数は時期とともに減少したことが考えられ、本遺跡で最も新しいと考えられるS B304は、中

tab. 1 黒谷川郡頭遺跡住居跡一覧表

遺構名	規模	平面プラン	土柱	伊等	時期
S B 101	一辺4.5m	隅内方形 焼火室跡		床中央部に設置	黒谷川Ⅱ式(新)
S B 102	西[長]8.5m～7.7m (張り出し部の規模3m×70cm)	南側に張り出し部をもつ円形 (4×1は居間を基盤) 幅10cmの溝溝	7本 (うち中央に1本)	中央やや金剛に残い伊(長軸110cm×短軸80cm、深さ約20cm)	黒谷川Ⅱ式(古)
S B 103	西[長]6.8m (張り出し部の規模)	南東側に2.0m×1.0m前後の張り出し部をもつ円形(建て付あり)床南西部に貯蔵穴状の方形の浅い落ち込み	6本 (うち中央に1本)	中央南東側に浅い伊(長軸150cm×短軸70cm、深さ約8cm)	黒谷川Ⅰ式(新)
S B 104	一辺4.5m	隅内方形	4本?	床中央よりに残い伊(長軸150cm×短軸85cm、深さ約15cm)	黒谷川Ⅱ式(新)
S B 105	一辺4.5m	隅内方形 型然に一部テラス状の段	不明		黒谷川Ⅱ式
S B 106	西[長]7.0～6.4m	南側に長さ3m、幅70cmの張り出し東側に1.7m×1.0m前後の方形の張り出し部をもつ円形焼火室跡	7本 (うち中央に1本)	中央やや南側に残い伊(長軸120cm×短軸100cm、深さ約8cm)	黒谷川Ⅱ式(古)Ⅰ
S B 107	西[長]5.0m前後か?	円形	不明		黒谷川Ⅰ式の範囲
S B 108	西[長]5.0m	北側に張り出し部を持つ円形床南北にまたった所に長方形の浅い落ち込み	7本 (うち中央に1本)	一部に伊に伴うと考えられる焼土・灰化物	黒谷川Ⅰ式(新)
S B 109	一辺3.4m以上	隅内方形 床の上段(石目・石杵の出土)	不明	不明	黒谷川Ⅱ式
S B 110	一辺4.5m	方形、北西部に拡張痕	4本? (うち1本確認)	不明	黒谷川Ⅱ式(新)
S B 112	一辺0.2m	隅内方形	不明	不明	黒谷川Ⅱ式
S B 301	一辺0.4m	方形 焼火室跡 床の上段(形痕をもつ砂岩角礫の出土)	不明	不明	黒谷川Ⅱ式
S B 302	一辺4.05～5.2m	方形 北、東西を「コ」の字形に幅90cm、高さ8cmのベッド状を設ける 南側に出入り口と考えられる浅い落ち込み。	4本	中央南側に伊(104cm×87cm、深さ11cm)	黒谷川Ⅱ式(新)
S B 303	一辺4.2m以上	隅内方形 焼火室跡	不明	不明	黒谷川Ⅱ式(新)
S B 304	直径7～7.58m	円形(円形住居跡で最も新しい)建て付あり 床の上段(石目の出土)	瓦木柱 (うち中央に1本)	中央南西側に2箇所のが伊 伊1: (1.84m×78cm) 伊2: (1.75cm×67cm、深さ12cm)	黒谷川Ⅱ式(新)
S B 305	一辺5.5m前後	方形 S B 306、309、310と併り合う。	4本柱	中央南側に伊(1.7m×1.0m、深さ30cm)	黒谷川Ⅱ式(新) ～Ⅱ式
S B 306	一辺5.1m	隅内方形 幅1.02mのベッド状遺構床の上段(石目の出土)	不明	ベッド状遺構内側に伊(1.31m×82cm、深さ22cm)	黒谷川Ⅱ式(新)
S B 307	一辺5.71m	隅内方形 幅1.0m前後のベッド状遺構床の上段(石目の出土)	不明	床中央に伊上、伊が確認される。	黒谷川Ⅱ式(新) ～Ⅱ式
S B 308	西[長]約6m	円形 S B 305、309、310に切られる	不明	不明	黒谷川Ⅰ式?
S B 309	4.3m×3.2m	方形	不明	不明	黒谷川Ⅱ式(新) ～Ⅱ式
S B 310	一辺5.5～6.0m	隅内方形	不明	伊	黒谷川Ⅱ式(新) ～Ⅱ式
S B 401	不明	円形 建て付あり 床の上段	不明	不明	黒谷川Ⅰ式の範囲
S B 501	直径6.8m	円形 南と東の2箇所へ張り出し部(1.8m×80cm)建て付あり 床の上段(石目の出土)	8本 (うち1本中央)	伊(1.50m×90cm、深さ7cm)	黒谷川Ⅰ式(新)

中央柱を除くと4本柱構造である。これは、平面プランの円形から方形への指向を柱の構造が示しているのかもしれない。

炬については、床中央からやや偏った位置に設けられるようである。規模は長軸1.2～2.0m前後で長楕円形を呈す。これらは、いずれも深さ10cm前後しかなく炭化物の堆積が認められる。一般にいわれる炬に比べて深度がない点が特異である。朱の精製工房を想定するなら、用途上の違いも検討していかねばなるまい。

黒谷川Ⅱ式（古相）～（新相）の間において、平面プランが円形から隅円方形へと変化する。この間は、先に述べたように集落の再編成がなされた時期で、東阿波型土器が成立する時期にもあたる。

黒谷川Ⅱ式（新相）の住居跡は、一辺4.5～5m前後の隅円方形を示し、主柱は4本柱を基本とする。炬は床面中央ないしはやや偏った位置に設けられ、深度はそれ以前のものに比べて深い傾向が認められる。ベッド状遺構が認められるのも特徴である。SB302でその全容が明らかのように入り口方向を除く三方を「コ」字状に巡らすのが一般的であったと予想される。なおSB306が床面に石臼を置いた状態で検出されたのをはじめ、精製用具（石臼・石杵）を伴う住居跡が目立ち、これらが朱の工房であったことを印象付ける。

黒谷川Ⅲ式に該当する住居跡はSB105、SB112などである。検出状態が悪かったため床面の状況を明確に捉え得ないが、建物の基本構造は前段階と変わらないと考えられる。住居跡の規模がほぼ一定だった前段階に比べSB112は一辺6.2mと大型のものも見られる。

黒谷川Ⅲ、Ⅳ式段階でもSB301が一辺6.4mと大型のものが見られるため、黒谷川Ⅱ式（新）で一時均質化した住居規模が、朱の精製の進展を要因に規模の規制が解体された可能性がある。しかし、各住居跡の構造が不明確であるため、機能面の比較検討ができず論拠に欠けるものである。今後資料の蓄積を待って論じたい。

黒谷川郡頭遺跡の土器相の再検討

本遺跡の土器相と編年観については、調査概報Ⅰで黒谷川Ⅰ～Ⅲ式に時期区分を行ない、調査概報Ⅱでは、先に示した黒谷川Ⅱ～Ⅲ式の土器群について「東阿波型土器」と位置付けた。現在この編年観は吉野川下流域で一般化しつつある。しかし、当初から問題点としてあげられた黒谷川Ⅰ式（弥生時代後期後半）と黒谷川Ⅱ式（庄内式古段階）の土器相のヒアタスが看過できぬものであり、Ⅲ式（庄内式新段階）ととらえていた土器群間にも時期差が認められるようになったため、今回再度検討することとした。

黒谷川Ⅰ式(古相)

従来黒谷川Ⅰ式としていた土器がほぼ対象となる。溝SD101(SD117)、SD115、SD401、SK401、SK402、SK403の資料を充てる。

壺形土器では、広口長頸壺(1、2)が盛行し、その他の器形を圧倒する。この器形は次の段階で急激に衰退するもので本時期を特徴づける。細頸壺は、完形品の出土は第Ⅳ次調査包含層出土のもの(6)1点に限られるが、口頸部は数個体分確認されている。広口壺は出土個体数が少なく、そのなかで、器高40cmを超える大型品が目につく。

器面調整は、外面タタキ+ハケ+ヘラミガキ、内面ヘラケズリが最も多いが、内面ハケ調整のものも相当量存在する。外面ヘラミガキ、内面ヘラケズリが顕著ではあるが、調整技法にばらつきは大きい。

広口長頸壺の盛行・細頸壺の存在は、畿内のV様式土器を対象にした寺沢編年様式4に認められる状況に近い。⁽⁵⁾

甕形土器は、一見畿内V様式的であるプロポーションと中部瀬戸内的な内面ヘラケズリ技法といった両要素が混合された土器が多い。また一方で畿内系の瀬戸土器(29、30)とそれと共通点の多い地産土器(28)が目目される。

器面調整は、外面のタタキをハケで擦り消す場合が最も一般的であるが、さらにヘラミガキを加えるものもみられる。畿内系ないしは畿内系類似の在地のものは、外面ハケ調整ののち下半にヘラミガキを施し、内面をヘラケズリ、両部ユビオサエである。この種の甕形土器は、技法面から次代の東阿波型土器を構成する甕形土器に系譜上つながるものと思われる。

鉢形土器は口縁部の外反の有無により、A、Bの2種類がみられる。口縁部の外反するB(49、50)は、畿内ではV様式後半、寺沢編年様式4以降に認められ、庄内式以降への残存度の低い器形である。調整では、内外面ともヘラミガキを施すものが優勢であるが、3割程度のはハケ調整され仕上げられるものを見受ける。底部は平底のものが大部分で、上げ底のものは、ほとんどない。

高杯形土器は、碗状の杯部をもつAと屈曲して外反する形態のBに分けられるが、その比率は出土数を見るかぎりほぼ等しい。高杯A(77)は、杯部が浅い碗状を呈し、脚部が大きく広がる形態を示す。一方、高杯B(78)は、溝SD101、SD115の遺物間で若干の形態差が認められる。SD101資料では浅い皿状の杯部をもち、広がった脚部を有するのに対し、SD115資料には口縁部の外反が小さいもの、脚部が大きく広がらないものなど古い

と考えられ形態を示すものが認められる。2つの遺構の遺物は他の器形では大きな差異はなく、若干の時期差はあるものの本時期のなかで納まるものと考えたい。

畿内V様式編年における本遺跡の時期においても、寺沢編年4様式におおむね該当し、近年従来の弥生時代後期V様式の後半をVI様式とする向きがあるが、それに基づけばIV様式⁽⁶⁾の古い段階と併行関係にある。

本時期に該当する搬入系の遺物は、畿岐系甕形土器(29, 30)が認められる程度であるが、畿岐での土器の実態がいまひとつ明らかでないためクロスデイトングが難しい。一方SD101、SD501上層などで散見する紀伊系の受口状甕形土器(31, 32)は船岡山遺跡⁽⁷⁾で年代観が示されており他地域の年代観を比較検討する上で有力な資料になると考えられる。SD101-22は底部に差異が見られるものの、船岡山遺跡第IVないしV期(V様式中葉)とされる甕形土器に類似する。

黒谷川I式(新相)

第V次調査で検出された遺構(溝SD501、住居跡SB501、土坑SK502)から出土した土器は、従来I式としてきた溝SD101、115出土土器と若干形態に差がある。これらの土器をI式でも新しい様相を示すものととらえた。

壺形土器では、広口長頸壺・広口壺・細頸壺がみられる。広口長頸壺はI式(古相)同様出土数が多い。口頸部のプロポーシオンは前時期と大差ないが、体部の形状は算盤玉形ないし横長の楕円形より、縦長の楕円形を呈するものが多く目につく。調整技法においては、外面ヘラミガキのものよりハケ調整が優勢になり、頸部内面にヘラミガキを施すものは皆無となる。

甕形土器は、I式(古相)のSD101、115資料と大差なく、外面タタキ+ハケ、内面ヘラケズリを施すものが主体である。基本的に古相段階と差のみられないなかで、器高32cm前後の均一な規格の体部長胴形の甕(34)が多く出土している。外面はタタキを細かいハケで摺り消し、内面は中位以下をヘラケズリ、上位をユビオサエで仕上げる。このため器壁はきわめて薄く、器面調整だけを取り上げると東阿波型の甕形土器と全く同じである。このタイプの甕は、古相段階でも出土するが、本時期になりと出土数が急増し、II式(古相)には残らない。従来から東阿波型甕は、I式(古相)段階の畿岐系甕と親縁関係をもつ一群にその系譜を求めてきた。しかし、このタイプの甕に技法的共通性がみられ、東阿波型土器成立の前段階的甕形土器として位置付けなければならぬ⁽⁸⁾。

S B 101出土の甕(33)は、大きく「く」の字状に屈曲する口縁をもち、端部は摘み上げず面をもつ。器面調整は外面タタキのち下半部ヘラミガキ、内面ヘラケズリ上位にユビオサエであり、外面下半はヘラミガキは、讃岐形甕によく見られる技法である。器形は、馬場川井戸1の庄内甕と類似するが口縁部は古い特徴を残す。胎土は結晶片岩粒を含む粘⁽⁹⁾喰川下流域産のものである。本時期では、もっとも新しい様相をもつ土器である。

鉢形土器は、古相段階とさしたる変化は認められない。口径30cmを超える大型品は出土しておらず、口径20cm前後のものが多い。

高杯形土器は、杯部が碗形の高杯Aと口縁が外反する高杯Bが、古相段階同様にほぼ一対一の割合で出土する。高杯A(79)は、器形・技法的に大差はないが、杯部の深度の増大が時期差として現われるものと考えられる。一方高杯B(80)は、杯部の深度の増大、口縁部の発達、受部と口縁部の接合の時間的プレスを示す稜の存在と口縁外反度の進行や脚部高の低下とそれに伴う短部の外反が増したことなど確実に同一系譜内での時間的後出性を示している。また(81)のようにA、Bの中間の形状を呈するものが希にある。

黒谷川Ⅱ式(古相)

黒谷川Ⅱ式は、庄内式の前半期にあたりとし、小型丸底鉢の出現をメルクマールとしてきた。⁽¹⁰⁾本遺跡はⅡ式ととらえられる土器出土する時間幅に、住居跡が円形から隅丸方形へと変化し、集落の再編成が行なわれているようである。このためⅡ式を古・新の2つに分け検討することにする。

Ⅱ式(古相)は、円形住居跡S B 102、S B 106、S B 304出土土器をあてるが、良好な一括資料に欠ける点は否めない。

I式段階で盛行した広口長頸壺がこの時期までは残存する。頸部が直立し、口縁部で強く外反するもの(10)である。口縁端部は拡張し、擬凹線を施すものがある。またS B 304出土の内傾する頸部をもち、口縁部は大きく外反し端部を拡張する広口壺(14)は、香川県鶴尾神社4号墳や大浦浜遺跡、鴨門市萩原1号墓でみられる壺形土器と系譜を同じくする讃岐系土器である。⁽¹¹⁾ ⁽¹²⁾ ⁽¹³⁾

甕形土器は、『短く「く」字状に屈曲する口縁部をもち口縁端部を軽く摘み上げる。』東阿波型甕への形態変化を追うことができる。住居跡S B 304-23(36)、24は、口縁端部をわずかに上下に拡張し、端面上に擬凹線を施す。これは、Ⅱ式(新相)以降優勢になる口縁端部摘み上げ手法の前段階的なテクニックと考えられる。体部は倒卵形ではあるが、Ⅱ

式（新相）のものに比べて長胴である。調整は外面をタタキのち細かいハケで擦り消し、内面を中位以下へラケズリ、上位ユビオサエによりきわめて薄い器壁を作出している。もはやこの時点で、東阿波型土器を構成する甕形土器が成立している。しかし内面へラケズリを伴うものの器壁が比較的厚く、口縁がやや大きく外反するⅠ式以来の甕も見ることができる。

鉢形土器では屈曲する口縁部をもつ鉢B（59）が急減し、鉢Aでは、浅い皿状のもの（54、55）が増加する。この器形はⅡ式（新相）以降多出し、東阿波型土器を構成する。小型丸底鉢（60）は、以前から指摘した通りⅡ式の開始を位置付ける器形である。この器形変化は従来から述べられてきたところであるが、本遺跡では遺構時期を明確に把握できるものは恵まれていない。

高杯形土器は、住居跡S B 304出土資料（82）のように、高杯Bの口縁部が発達し、製作時の時間的プレスを示すように受部と口縁部に明瞭な稜をもち屈曲するようになる。一方碗状の杯部をもつ高杯Aはこの時期以降激減すると考えられる。

黒谷川Ⅱ式（新相）

従来Ⅱ式ととられてきた遺構のなかで、新しい様相を示す隅四方形の住居跡（S B 104、110、302、303、306）からの遺物を充る。また一括性にはやや欠けるが、溝SD122（302）の遺物にも本時期のものがある。

壺形土器は、住居跡S B 104に見られるように直立する頸部と大きく外反する口縁部をもち、端部を上下（特に上方に積み上げるように）拡張して端面上に擬凹線を施すもの（15）がある。口縁部の形態をみる限りⅡ式（古相）から本時期にかけて『口縁部が大きく拡がり、端部を積み上げ擬凹線を施す。』東阿波型土器の典型的広口壺と近いものとなっている。

広口壺の口縁部上方にさらに直口する口縁部を積み上げた形の二重口縁壺が、この時期に出現する。二重口縁部の外面に凹線文を施すもの（17）であるが、これと類似した土器が淡路島南淡町阿知正福寺遺跡で出土している。

一方Ⅱ式（古相）まで出土のみられた広口長頸壺・細頸壺がほとんど姿を消す。⁽¹⁴⁾

甕形土器は、他の器形よりも明瞭に器形変化をみせる。Ⅱ式（古相）段階で第Ⅴ様式的要素を払拭し、短く「く」字状に屈曲する口縁と倒卵状の体部を有したものが成立し、本時期には、底部が平底である（39）以外、形態・調整技法ともⅢ式段階の典型的な東阿波

型土器と同じものになる。

鉢形土器は、外反する口縁をもつ鉢Bは溝S D122で出土がみられる(65)が、本時期以降激減する。鉢Aは、内湾して立ち上がり、平底をわずかに残す小型品(63, 64)と浅く内湾して立ち上がり口径が器高を大きく凌駕する皿状のもの(61, 62)がその大半を占める。

高杯形土器は、資料に恵まれず実態が把握できていない。高杯BはⅡ式(古相)段階で受部に対する口縁部の発達が見取されたが、Ⅲ式段階で口縁が受部を凌駕した形態に変化するためその中間的な形態が予想される。

搬入系の遺物は、少量しか認められない。住居跡S B302出土の壺形土器は、搬入系の遺物と考えられるが産地が特定されていない。

安満遺跡井戸1出土から本時期と考えられる東阿波型の広口壺が出土している。

(15)

黒谷川Ⅲ式

調査概報Ⅱで記述したように井戸1(SE101)の遺物に本時期の特徴が最も現われる。これ以外に、住居跡S B112、S B113、土坑S K106、S K126、S K129などが該当する。

Ⅱ式段階を通じて形成された東阿波型土器の特徴が、広口壺形土器、甕形土器を中心に明瞭に現われる。この時期の典型的な広口壺形土器は、倒卵形ないし扁平玉形の体部をもち、口縁を大きく外反させ端部を積み上げ端面上に擬凹線を施すもの(18~20)である。二重口縁壺形土器は、広口壺の口縁に外反する口縁を付加するもの(21)で、Ⅱ式(新相)に比べ口縁立ち上がりが浅く、外反度が強い。

甕形土器は、『口縁が短く「く」字状で端部を軽く積み上げ、体部は倒卵形を呈す。』典型的な東阿波型の甕(43)である。底部は平底はなくなり、尖り気味の丸底になる。体部内面のヘラケズリによりきわめて薄い器壁を作り、熱効率が高い優良な甕である。

鉢形土器は、従来東阿波型土器を特徴付ける形態を示し得なかった。主要な器形は、内湾して立ち上がる小型のもの(68, 69)と皿状に大きく内湾する中型(口径20cm前後)もの(67)がある。前者は外面タタキ、タタキ+ヘラケズリ・ハケ、内面ハケ、ケズリなど一律ではなく、また他地域ときわだった差異を示すものではないが、後者は器形・調整に特徴がある。外面は底部周辺を中心にヘラケズリが看取され、内面には条線状の細線のミガキが施される場合が多い。口縁端部のテクニクは、ナデを加えながら内上方に軽く積み上げられる。壺・甕同様端部をナデつつ積み上げる手法は、当該地域の特徴と考えられる。

高杯形土器は口縁部の発達・外反が著しく、受部との間に明瞭な稜をもつ(83)。内外面ともハケ+ミガキで調整し、杯部内面は条線状のミガキが特徴的である。また小型器台がこの時期から見られる(86)。

溝SD122から庄内甕(41、42)・吉備系の高杯が出土しているが、混入が著しいため時期の比較資料になりにくい。

近年畿内を中心に庄内式段階での遺構から東阿波型土器が出土することが増えてきた。住居跡SD112出土の二重口縁壺(21)は、八尾市中田1丁目39土坑3に類列があり、亀井北遺跡では、浅い皿状の鉢(67)や典型的な東阿波型甕(43)が出土している。また和歌山県和歌山市西田井遺跡住居跡SB203や御坊市東郷遺跡SD-4から本段階の壺・甕が認められる。現在摂津・河内・紀伊・淡路などで東阿波型土器が確認できるが、Ⅲ式段階のもの(18)が最も多く、彼の地では庄内式でも最も新しい段階(一部寺沢編年の布留0式に下る可能性(20)がある。)と共存する場合が多い。(21)

黒谷川Ⅵ式

これまでⅢ式とした資料で新しいものを分割する。住居跡SB109、301、土坑SK109、302、303、307、方形溝溝2号墓城の土器を充てるが、土坑SK308にも混入する。

広口壺形土器は、口縁端部の積み上げは変わらないが、頸部から口縁部への屈曲が甘くなり、シャープさに欠けるようになる。口縁外面にタタキを残すもの(22)もある。井戸1で出土した口縁を大きく外反させる広口壺(20)は、直立する頸部からナナメ上方にそのまま立ち上がる頸部をもつものへと変化すると考えられる。八尾市萱振遺跡SE03出土の東阿波産の土器は、この形態を示す。二重口縁壺(25)は、二重口縁部分の立ち上がり(22)が深くなり、体部が球形に近く、調整技法は、体部外面タタキ+細いハケ、内面ケズリ+一部ユビオサエの手法は変わらない。

甕形土器は、体部が倒卵形から球形に近づき(45)底部にヘラケズリを加え丸底化をはかっている。

鉢形土器は、浅い皿状のもの(67)の底部が尖り気味の丸底から、体部下半の内湾度が増し緩やか弧を描く丸底ないし平底に変化する(71、72)。器型が高く、口縁を僅かに外反させる鉢(75)も少量認められる。いずれの鉢も底部をヘラケズリして丸底化をはかる。器面調整は外面をタタキないし原体幅の広いヘラケズリとハケ調整は極力避け簡素化に向かう。

高杯形土器は、杯部の口縁部と受部の境を示す稜が不明瞭になり、脚柱部の径が大き

なる(84, 85)。口縁部・脚裾部に施されたヘラミガキは密度が下がり、(タタキ)+ハケ+ミガキの工程からミガキを省く傾向が見られる。

住居跡S B 109では畿岐系の二重口縁壺(26)が出土している。これは兵庫県川島遺跡跡20溝の壺Cとしているタイプである。和歌山市西田井遺跡SX12で布留式の古い段階(寺沢編年布留0⁽²³⁾~1式)の土器とともに東阿波の広口壺が出土している。

各時期の年代観は、調査概報Iで示した「I式：弥生時代後期後半、II式：庄内式古段階、III式：庄内式新段階」の大枠は変わらない。新たに設定したI式(新相)は従来のI式に対し、相対的に新しい様相を示すものとし、後期末と考える。II式(古相)段階が、萩原1号墓と併行する。IV式は、搬入・搬出土器によって布留式の古い段階(寺沢編年布留0式、一部1式を含む)であるとの知見が得られるが、在地の甕形土器を中心に布留式の初現的特徴がみられる。

今回の編年は、敢えて本遺跡の遺構出土遺物に限って作成した。なお、本稿で言及できなかった小型丸底鉢・器台⁽²⁶⁾については検討を加え次稿にまとめることとする。

* () の番号は、別添図黒谷川郡頭遺跡土器編年試案の土器番号に対応。

注

- (1) 菅原康夫 「黒谷川郡頭遺跡II」 徳島県教育委員会 1987
- (2) これについては、菅原康夫 「吉野川流域における弥生時代終末期の文化相」『考古学と地域文化』『同志社大学考古学シリーズIII』1987や大西浩正 「黒谷川郡頭遺跡III・IV」1989に述べた通りである。
- (3) 藤田任亮・松原伸二ほか 「瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報(IX)」1988 香川県埋蔵文化財研究会
- (4) 註(1)に記載
- (5) 寺沢薫編 「奈良市六条山遺跡」 奈良県立橿原考古学研究所
- (6) 寺沢薫・森岡秀人編著 「弥生土器の様式と編年 近畿I」 1989
- (7) 土井孝之 「船岡山遺跡発掘調査報告書」 和歌山県教育委員会 1986
- (8) (1)(2)に記載
- (9) 「馬場川遺跡発掘調査概要IV」 東大阪市教育委員会 1976
「八尾南遺跡」 八尾南遺跡調査会 1981

- (10) 菅原康夫 「黒谷川郡頭遺跡Ⅰ」 徳島県教育委員会 1986
- (11) 渡部明夫・藤井雄三 「鶴尾神社4号墳調査報告書」 高松市教育委員会 1983
- (12) 大山真充・真鍋昌宏ほか 「瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財調査概報(Ⅳ)」 香川県文化財保護協会 1982
- (13) 菅原康夫 「萩原墳墓」 徳島県教育委員会 1982
- (14) 浦上雅史氏の御好意で実見。
- (15) 森田克行・橋本久和 「安満遺跡発掘調査報告書-九地区調査-」 高槻市教育委員会 1977
- (16) 米田敏幸 「八尾市中田町1丁目39出土土器の胎土について」『埋蔵文化財研究会台15回研究集会発表要旨』 1984
米田敏幸 「中河内の庄内式と兼入土器について」『考古学論集・第1集』 考古学を学ぶ会 1985
- (17) 小野久隆・服部文章他 「亀井北遺跡(その1)」財団法人大阪文化財センター 1986
- (18) 土井孝之氏の御好意で実見。
- (19) 「東郷遺跡」御坊市教育委員会 1987 及び前田敬彦氏の御教示
- (20) 摂津では、高槻市安満遺跡・神戸市長田神社遺跡、河内では大阪市加美遺跡・亀井北遺跡・久宝寺北遺跡・八尾市中田遺跡・萱振遺跡・水越遺跡、淡路島では西淡町沖田南遺跡、播磨では姫路市長越遺跡などで現在確認されている。
- (21) 寺沢薫編 「矢部遺跡」 奈良県橿原考古学研究所 1986
- (22) 大野薫 「萱振遺跡発掘調査概要Ⅰ」 大阪府教育委員会 1984
- (23) 石野博信 「川島・立岡」 太子町教育委員会 1971
- (24) 土井孝之氏の御好意で実見。

出土土器觀察表・石器計測値表

tab. 2 出土土器観察表

住居跡S B501出土土器

器 種	番号	法 量	口 頸 部	体 部	底 部	色 調	胎 土	出 土 地	備 考
罎	1 /10	口径 14.1	<ul style="list-style-type: none"> ・「く」の字状に大きく外反。 ・口縁部外側におさめるか、下方に若干膨部。 ・口縁部内面ともヨコナデ。 ・胴部内外面にユビオサエ。 	<ul style="list-style-type: none"> ・胴張りし胴部中央に排水をもつ。 ・体部外面3条/cmの水タタキ。 ・外面上半タタキの連続的なタテハケ・ヘラミガキ。 ・外面下半タタキの連続的なヘラミガキ。 ・内面上半ヨコヘラミガキ、下半タテヘラミガキ。 		黄褐色	粘結片 岩 長石 石英 赤色酸 化土粒	住居跡 S B501	胴部に 一筋入 ス付着
罎	2 /10	口径 5.2			<ul style="list-style-type: none"> ・突出しない平底。 ・外面2条/cmのタタキのち10条/cmのタテハケ。 ・内面1.5cm幅のヘラミガキ。 	暗褐色	長石 黒雲母	同上	スス付 着 二次焼 成著し い。
鉢	3 /10	口径 21.2 器高 10.0	<ul style="list-style-type: none"> ・口縁部強く外反。 ・口縁部外側におさめる。 ・内外面ともヨコナデ。 	<ul style="list-style-type: none"> ・内面頸柱に立ち上がる。 ・外面4mm幅の右上がりのヘラミガキ。 ・内面4mm幅のタテヘラミガキ。 		淡黄褐色	細粒の 長石・ 赤色酸 化土粒	同上	体部 1/8 周に黒 斑あり。
高杯杯部	4 /10	口径 24.0	<ul style="list-style-type: none"> ・口縁部強く外反。 ・口縁部外側におさめる。 ・湖面上に1条の縦印線をもつ。 ・内外面ともヨコナデ。 	<ul style="list-style-type: none"> ・杯底縁やかに内湾しながら立ち上がる。 ・外面7条/cmのナナイないヨコハケのち3mm幅の連続的なヘラミガキ。 		淡黄褐色	微粒の 長石・ 黒雲母 ・石英	同上	
高杯杯部	5 /10			<ul style="list-style-type: none"> ・胴上部より底部にかけて緩やかに外方に広がる。 ・内面凹面通し。 ・胴部外側にタテハケ。 ・胴部内面に紋目。 ・中空 	<ul style="list-style-type: none"> ・胴部外側におさめる。 ・外面3mm幅のタテヘラミガキ。 ・胴部ヨコナデ。 	黄褐色	石英 長石 赤色酸 化土粒	同上	胴部に 黒斑あ り。

器種	番号	法量	口頸部	体部	底部	色調	胎土	出土地	備考
広口壺	8 /10			<ul style="list-style-type: none"> ・算盤玉形の体部 ・外面上半5条/1.5cmのヨコナ いしナメハケ。 ・外面中位3mm幅のヨコヘラミガキ ナ ・内面上半ユビオサエ。 ・内面中位以下7条/1.4cmのナ ナメハケ。 	<ul style="list-style-type: none"> ・突出しない平底 ・外面3.5mm幅のタテヘラミガキ。 ・外面水平方向のタテキ一部残存。 ・内面ユビオサエ。 	外面 黄褐色 内面 黒灰色	赤粘の 長石・ 黒雲母	住野跡 SB301 P1	

土坑SK502出土土器

器種	番号	法量	口頸部	体部	底部	色調	胎土	出土地	備考
広口壺	1 /14	口径 13.7	<ul style="list-style-type: none"> ・頸部直下に内縁突縁に立ち上がる。 ・口縁部外上方に大きく広がる。 ・口縁部を僅かに上方に拡張する。 ・唇面に1条の縦凹線。 ・外面2.5cm幅のタテヘラミガキ。 ・頸部タテハケ+タテヘラミガキ。 ・内面口縁部ヨコナデ、頸部2.5 cm幅のヨコヘラミガキ、頸部付 け段部分にユビオサエ。 			黄褐色	粘細片 長石 岩 石英 赤色酸 化土粒	土坑 SK502	
広口長頸壺	2 /14	口径 15.9	<ul style="list-style-type: none"> ・頸部直立し、口縁部僅やかに外 反する。 ・口縁部部僅かにつまみ上げる。 ・外面7条/cmのタテハケ、頸部 にはのち3mm幅のタテヘラミガ キ。 ・口縁部部無いヨコナデ。 ・内面口縁部7条/1.4cmのヨコ ハケ、頸部ユビオサエ。 	<ul style="list-style-type: none"> ・外面7条/1.4cmのタテハケキ 一部に3mm幅のタテヘラミガ キ。 ・内面肩部ユビオサエ、胎土凹線 み上げ段明線に残す。 		淡黄褐 色	石英 長石 黒雲母 (赤砂 粘多く 含む)	土坑 SK502	